

Z32-B88

島崎村 友島生馬 監修

# 金の船

国立国会  
8. 3. 26  
図書館



第五号

五月號

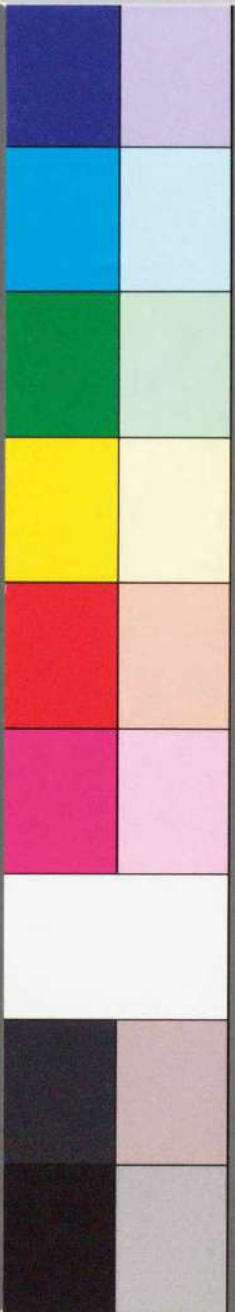
本誌十年四月五日發行

本誌十年三月六日印刷

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

## Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



## Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007. TM: Kodak



信 用 あ る 此 マ ク

蓄音器とレコードは



ニッポノホン  
驚印を御選びあれ

▼金の船童謡のレコードもあります

清小浪書薩筑俚端芝童長	元唄節節節節節節節節	保都二征オの川小博海ア子嘘四	々上獨ベざ	々り召ま中敦多晏	逸(文句入)	新集	島盛節寺	清元喜久太夫	水戸金太	津田清美	市川皖保	坂本芝水	井上鶴子	田澤初子	吉岡秀三郎	根岸歌劇團	松島庄郎
-------------	------------	----------------	-------	----------	--------	----	------	--------	------	------	------	------	------	------	-------	-------	------

株式會社 日本蓄音器商會  
販賣部 東京京橋銀座一丁目  
大阪東區南久寶寺町四丁目

りあに所る到國全店約特所張出の社當

目錄月報  
無代進呈

▽西條八十先生著

第二十版

來 出

小抒情

静かなる眉

抒情詩名作叢書第一編 實價金九十錢  
袖珍箱入天金顔美本上製 送料金六錢

静かなる眉の中より

きりぎりす きりぎりす  
そつと挽らへて姉さんの  
紅い手紙に忍ばせた  
ゆふへの夢のきりぎりす  
銀の八時のあざましが  
ちり／＼と鳴る頃に、  
蓋をはれば姉鹿子の  
きりに包まれ  
翡翠の櫛と  
なつてこぼれた きりぎりす。

◎名聲高き西條先生が將に年若き諸君の爲めに聲ふるはせて唄はれたる若き日の思出で何人も是非一度お讀みにならむことを御すゝめいたします

抒情詩 第二編 小詩 寶石の夢 水谷 勝先生著 袖珍箱入上製顔美本 實價九十錢送料六錢 (版四忽)

抒情詩 第三編 民衆集 別後 野口雨情先生著 袖珍箱入上製顔美本 實價九十錢送料六錢 (版三忽)

新童話 不思議の窓 西條八十先生著 模範的新童話集也 實價金一回五十錢送料十錢 (版新)

發行所 東京 市 神田區 南區 保町 四丁目 六番 尚文堂



書叢物讀庭家篇長

# 庫文子と母

- 12 光を待ちて 葉山不二雄著
- 11 雪割草 福士幸次郎著
- 10 黄金の星 福田正夫著
- 9 小さな足跡 白鳥省吾著
- 8 一本の杖 山村暮鳥著
- 7 銀の小鈴 井上康文著
- 6 愛の歌 野口雨情著
- 5 日の出づるまで 芥野雅子著
- 4 美しき國へ 蘆谷蘆村著
- 3 眠りの百合 吉屋信子著
- 2 森の祈り 沖野岩三郎著

第一編 たんぽぽの家 (四月) 鈴木善太郎著

監修 森鷗外先生 問 岸邊福雄先生 湯原元一先生

### 規略込申

□四六版箱入各巻二百二十頁以上  
 □表紙石版四度口繪三色版背金字  
 □裝幀並に口繪川上四郎畫伯

一時拂拾貳圓五十錢 (外送料市内)  
 毎月拂壹圓貳拾錢 (六錢地方十)  
 申込締切大正十年四月三十日  
 (毎月一冊十日發行)  
 ハガキにて御申越しあれば見本  
 進呈す

「金の船」をお読みになる御家庭なら、きつと『母と子文庫』十二冊の名篇をお備へ下さいますと信じます。なぜならば本叢書は、彼のバアネツト夫人の「小公子」の如く、家庭子女の最良讀物たると同時に、又實にその父母の讀物であるからであります。御覽下さい、この寶玉の如き十二の收穫を!

東京小石川戸崎九 ○ 創文社 電話代東 小石川 電話代東 石川 電話代東 戸崎 電話代東 九町 電話代東

るよに法輯編式新最るけ於に界話童

# 軽い王女

世界童話名作集

(四六版各冊二百頁内外三色版凸版) 挿畫數葉入 壹冊 定價壹圓參拾錢



版三忽

第一編 驢馬の皮

ベロ、作 佛蘭西のシャルル・ペロ

此の二冊に集めたお伽噺は古くから露西亞の國民の間にお伽噺でその代表的傑作であります。

第二編 魔法比べ

フアナシエフ作 井上芳子譯

此の二冊に集めたお伽噺は古くから露西亞の國民の間にお伽噺でその代表的傑作であります。

豫告 第四編 變な家鴨

アンタルセン作 中島孤島譯

第五編 黄金の河

ラスキン作 秋田雨雀譯

第六編 殿様の夢

トルコの有名な話 大久保幸次譯

ジョーチ、マクトナルド作 矢口達譯  
 幸福な王様と皇后との間に出来た可愛  
 いお姫様が、魔女に呪はれて身體の目  
 方を失ひ、いろ／＼の困難に出合ふ所  
 を、心のやさしい、しかし勇氣に富む或  
 る國の王子に助けられ、芽出度く結婚  
 されるといふ美しい夢の挿話に富む童  
 話であります。

東京市牛込區 精華書院 電話代東 一町 電話代東 七五七 電話代東 五七三 電話代東 七五七 電話代東



金の船

目次

五月の花(表紙、石版刷)……………岡本歸一  
あざらしの唄(口絵、原色版)……………岡本歸一  
青い空(子守唄、曲譜)……………野口雨情  
闇と光(日本神話)……………楠山正雄  
例のステッキ(繪はなし)……………岡本歸一  
鏡國めぐり(長篇童話)……………西條八十  
支那伊蘇普物語(寓話)……………楠山正雄  
鎌倉権五郎(童話)……………沖野岩三郎  
懸賞金壹萬圓(ボンナ繪)……………船橋重一  
不思議の徳利(童話)……………齋藤佐次郎



Kiichi

第三卷



後の山六爺さん

沖野岩三郎

附録

諸國傳説童話(傳説)……………藤澤衛彦  
猿の王様と湖水の鬼(童話)……………三宅房子  
ひばり(童話)……………若山牧水  
黄金の河(童話)……………栗原古城  
とろろ薯(挿話童話)……………長岡襄  
枯野原(童話)……………野口雨情選  
汽車(自由畫)……………若山鼎選  
雲の衣(幼年詩)……………若山牧水選  
浅間山の噴火(霧方)……………吉編輯部選  
挿通信……………岡本歸一







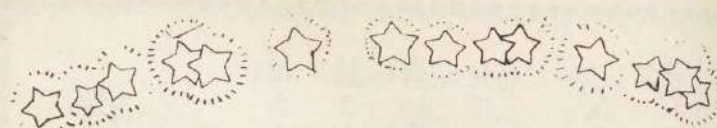
あざらしの唄

岡本錦一畫

大工とあざらしは低い石の上に腰かけました。  
牡蠣の子供たちは一列にならんで、をとなく  
お話のはじまるのを待つてゐました。

「さ、これからいろいろなお話をはじめます。  
靴だの、船だの、封蠟だの、キヤベツだの、王  
様だの、お話、それから豚には翼があるかない  
か、さうしたお話をはじめます」と、あざらし  
が云ひました。  
(原稿めぐりの二十八頁を挿進なま)

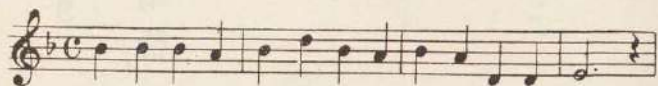




# 青い空

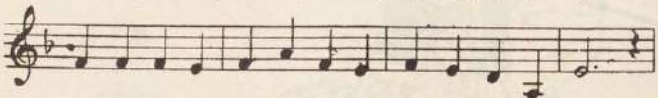
本居長世作曲

(子守唄)



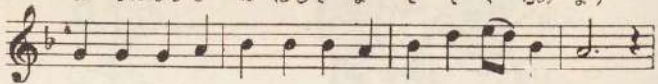
4 4 4 3 | 4 0 4 3 | 4 3 0 0 | 7 0 |

カアサンクルマデネニサント  
あをいそらみておいであをいそらに



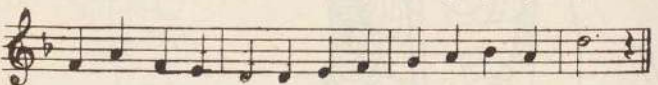
1 1 1 7 | 1 3 1 7 | 1 7 0 3 | 7 0 |

7ライソラアライカラミテキマセウ  
よるにるこおほしまでてくるのよう



2 2 2 3 | 4 4 4 3 | 4 0 7 0 4 | 3 0 |

7タツデアンヨガデキターカラ  
サあさんがへりのおせいきは



1 3 1 7 | 0 0 7 1 | 2 3 4 3 | 0 0 |

カアサンキナクモキラレルアネ  
かおへてねえさんとまてませう





青い空 (子守歌)

野口 雨情

母さん来るまで

姉さんと

青い空 青いから

見てゐませう

二歳で

歩行が出来たから

母さんゐなくも

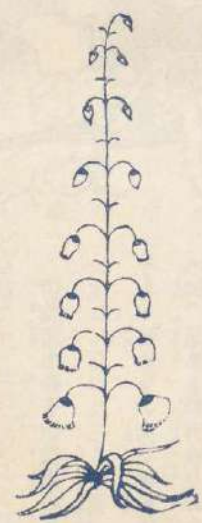
ゐられるわね

青い空 見ておゐで

青い空に

夜になると お星さま

出て来るのよう

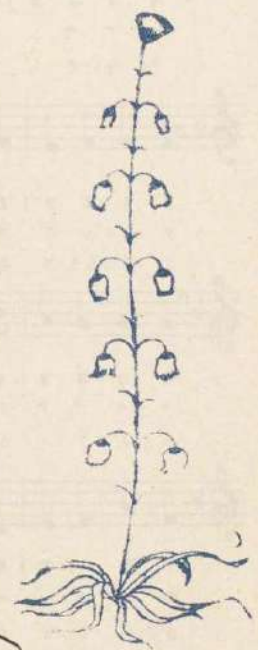


母さん歸りが

遅いときは

門へ出て 姉さんと

待つてゐませう







# 闇と光

(日本神話)  
(その三)

楠山正雄

これは伊弉諾の命が、女神の伊弉冉の命に別れて、

夜見の國からお歸りになつた後のお話です。

伊弉諾の命と伊弉冉の命の間に  
お生れになつた三人の貴い御子の  
うち、姉さまの大日靈貴の命は日  
の神、弟さまの月夜見の命は月の  
神で、晝と夜に分れて、空の上か  
ら下界を照らして、海の潮の満干  
まで掌つてお出になりましたが、  
たゞ一人末の御子の素戔嗚命は、  
子供の時からそれは男らしい、お  
勇しいお生れ付きなので、御両親の神さまは、  
『此の子はこんなに強いから、日本の國の王さまに  
して、悪い夷どもを征伐させることにしよう。』  
と仰しやつて、いつまでもお傍にお置きになり、と  
り分け母神は大變可愛がつてお育てになりました。

こんな風に素戔嗚命は、母神に甘へてお育ちになつたものですから、母神がひよんなことでお隠れになつてからは、いつまでもくお後をお慕ひになり、『かあさまの所へ行く。かあさまの所へ行く。』といつてお泣きになるので、父神も困りきつていらつしやいました。

並はづれてからだの大きい、立派な若者でいらつしやるし、拳を八つ並べたほどの長い鬚が胸の上に乗れてゐる、強さうな様子の方が、明けても暮れても、天まで届くほどの大きな聲を出して、だゞ泣きにお泣きになるので、その勢ひで青々と茂つてゐた山もみる間に枯樹の禿山になり、海といふ海、河といふ河の水は乾上がつて、鳥獸は棲處がなくなり、魚類は乾干になつてしまひました。田畑は荒れはうだい、病氣はやはりはうだい、それに付け入つて悪い禍の神たちが國中を狂ひまはるので、人民は大

へん態儀をいたしました。

父神は、この有様を見て、大層御心配になり、或時素戔嗚命をお傍にお呼びになつて、

『命、この日本の國はお前の領分にして、よく治めるやうに言ひ付けてあるのではないか。それを何と  
思つて、國の荒れるのも構はず、明けてもくれても、  
泣きわめいてばかりゐるのだ。』ときびしくお叱りにな  
りました。

けれども素戔嗚命はやはりだゞ泣きをお止めにな  
らないで、

『かあさまの所へ行く。夜見の國へ行く。』

とばかり仰しやいました。とうく父神も持て餘し  
ておしまひになり、

『あんな穢い國へそれほど行きなれば、どうとも  
勝手にするがいい。もうこの國に住むことはならな  
いぞ。』



と腹立聲で仰しやうて、素盞雄命を追出しておしまひになりました。

二

素盞雄命は、父神に捨てられたので、よけい口惜しがうて、

『よし、そんなら夜見の國へ行つてやる。』

と言つて、お出かけになりました。けれどこれなり夜見の國へ行つてしまへば、もう此の世界に歸つてくることはできないので、せめて高天原にいらつしやる姉神に、お暇乞をしてから行かうとお思になり、疳癩まじりに大層な勢で、空へ上つてお出でになりました。そして命の泣聲がびつたり止むと一緒に、人間の國は急に静かになつて、禿山は青々となり、海や河には水が沸き出して、うららかな空の下に、昔にかはらない松風の音がのどかに聞えました。それに引きかへ空の上の騒ぎといつたらありません



素盞雄命が、すしんくと威勢のいゝ力足踏んで上つてお出でになると、さつそく風が起るし、雲が飛ばし、山は鳴るし、川は沸き返るし、草木は靡き伏して、鳥獸は逃げ隠れるといふ有様です。

天照大神は、このさわぎにびつくりなすつて、『命が恐ろしい勢で上がつて来たのは、容易なことではない、あんな亂暴な人だから、さつとわたしの

國を取りに来たに違ひない女だと思つて馬鹿にするのであらうが、どうしてわたしが負けるものか。』と仰しやうて、手早く髪を解いて、男のやうな髪にお結びになり、八尺瓊の勾玉を幾つとなく紐に通したも



のを、兩方の聲にも、兩方の手にもお聞きつけになりました。そして手本の箭壺で五百本の箭壺をお背負ひになり、右の手で弓を高くつき立て、左の手で劍の柄をかく握りしめていらつしやいました。勢ひ込んで力足を踏みめめくするたんびに、お庭の堅い土が吹雪のやうにばらばらとび散りました。そして弟命のお姿が見えると、高天原が二つに割れるやうな大きなお聲で、

『どうしてお前は上つて来た。』

と、荒々しくお問ひかけになりました。素盞雄命は、姉さまの大へんな勢を見て、あつけにとられておしまひになりました。それでもごく無邪氣に、

『どうもしやしません。わたしがあんなま





先づ姉神は神神の十指の鎧を抜いて、三つに折つて、天の眞名井といふ井戸  
の中で、から／＼とお濯ぎになり、それを口の中に入れてがり／＼囁んで、  
ふつとお吐き出しになつたお息が、霧のやうにとび散る中から、三人の奇麗  
な姫神がお生れになりました。

こんどは弟神が、姉神の左の髪におかけになつた八尺の曲玉を頂いて、やは  
り天の眞名井でから／＼と濯いで、それをお口の中に入れて、がり／＼囁ん  
で、ふつとお吐き出しになつたお息が、霧のやうにとび散る中から、ひよつ  
こり、一人の美しい男神がお生れになりました。

その時素盞雄命は、長いお鬚を引つ  
張りながら、

『そりや勝つた、正に勝つた、わたし  
が勝つた。』と三度仰しやつて、躍り上  
がつてお喜びになりました。そして生  
れたお子には、正勝吾勝勝速日天之忍  
穂耳命といふ名がつけました。命はつ  
づいて、姉神の曲玉を噛んで、後か



うと思つて、姉さまの所へお暇乞に來たのです。』

と仰しやいました。天照大神は、それでもまだお疑ひの晴れない様子で、

『お前の正直な心、言葉だけでは分からない、證據を見せてくれないか。』  
と仰しやいました。素盞雄命は、熱心を顔にあらはして、

『それでは姉さまとこゝで誓ひをして、お互ひに子供を生みませう。』と仰し  
やいました。

『よし／＼。それでは若しお前の生んだ子が男であつたら、正しい心の證據  
だし、女の子だつたら、正しくない證據だよ。』

そこでごさやうだいは、天の安河の兩岸に分かれてお立ちになりました。

りいつまでも泣いてゐると、おとうさ  
まがどうしたのだと仰しやつたから、  
おかあさまの國へ行きたいと申し上げた  
ら、おとうさまが大へんにおこつて、勝  
手にしろといつて、わたしを追ひ出し  
ておしまひになつたのです。だからわ  
たしはこれからおかあさまの國へ行か





ら彼からと都合五人の男の神さまを、お生みになりました。  
 これで、弟神の潔白なお心がよく分かつたので、天照大神も大層お喜びになり、  
 「前に生れた三人の女の子は、あなたの剣を嚙んで生れたのだから、あなたの子です。後の五人の男の子は、わたしの勾玉を嚙んで生れたのだから、わたしの子です。」  
 と仰しやつて、その中でもすぐれて貴いお姿をした天之忍穂耳命を、大神のお世継とお定めになりました。

三

素戔雄命は、首尾よく誓ひに勝つたので、すつかりとくにおなりになりました。さうなるともと／＼徒らな神さまのことですから、ちつとしてはおられません。みんな氣をゆるしてゐるのを幸ひ、毎日野原を駆けまはつてお出になりますと、もう面白くつてたまりませんから、いつか母神の所へ行くことなどは忘れて遊びほうけていらつしやいました。そのうち段々徒らが劇しくなつて天照大神の御料田になつてゐる天の狭田長田の中にもう春の末で、百姓共が種を蒔いた後へ行つて、澤山の種を打ち撒けて見たり、田に水が足りないので百姓共が溝を堀つて水を送るやうに



してあると、その溝を埋めて水の手を乾したり、反對に水が餘るので畔を作つて水をせいで置くと、その畔を突き崩してだく／＼田の中へ水に注ぎ入れたりなさいました。さうかと思ふと、百姓共の田の中で働いてゐる中へ馬を追込んでおどろかしたり、畑の中に棒杭を立て、百姓の躓いて轉ぶのを見て、手を拍つてはやしたりなさいました。

「きたないものは、弟がきつとお酒に酔つて苦しませに戻したにちがひない、溝を埋めたり、畔を崩したりしたといふのは、きつと少しでも土地をむだしやつて、弟さまのために、取りつくろつておやりになりました。

素戔雄命はそれでもまだいたづらが爲足りなくつて、此度は大神がお初穂を召上がる御殿のそれは塵つ葉一つのこさないきれいなおざしきの上に、惜しげもなくうんこをおひりちらしになりました。

それでも大神は、やさしい姉さまの情愛で、弟さまのいたづらをお叱りもなく、外の神様に向つては、





こんなにしてかばつておやりになると、素盞雄命はそれをいゝことにして、いよゝゝ悪いことばかりしつづけてお出ででした。

とうとうさすがの姉神も、勘忍の緒を切つておしまひになる時が来ました。或日のことでした。姉神は齋服殿といふ機織屋の中に入つて機織女の機を織る所を見ていらつしやいました。すると素盞雄命は「今日こそあの澄ましてゐる姉さまを、ほんとにびつくりさせてやらう。」とお思ひになり、天の斑駒といふ大きな馬の皮を逆さに剥いで、機織屋の家根をつき破つて逆様に投り込みました。

生皮を剥がれて血みどろになつた馬は、それでもまだ息はありますから、苦しませに暴れ出ししました。中にある二人の女神はどんなにびつくりしたてせう。

可哀さうに機に腰をかけてゐた機織女は、あつと

が、がや／＼わや／＼聞えるばかりで、何が何だか分りません。禍の神ともはいひ辛ひにして、いよきちがひのやうに狂ひまはつてゐました。

日の光がなくなつてしまつたので、高天原の騒ぎは大變です。泣く神、怒る神、やけになつて笑ふ神、罵つたり叱つたりするさま／＼の聲が闇の中でやましく入りまじりました。これではいけないといふので、八百よろづの神といつて、たくさん神さまたちが、廣い天の安の河原に集つて、相談をはじめましたが、どうも神さまの知恵にも及ばないので、毎日より集まつて溜息ばかりついてゐますと、高産靈神といつて、高天原では一番古い、もう御隠居の神さまから、あまり氣の毒だからといつて、お子の思兼の神をおつかはしになりました。此の神さまは高天原で一ばん思慮分別の深い、利口な神さまでした。その時思兼の神のいふには、

言つてとび上る拍子に、胸先を機にはげしくぶつけて、うんといつたまゝ死んでしまひました。此の容子を御覽になつた姉神も、やはり機の角に横腹をぶつけて、ひどい怪我をなさいました。

天照大神もこの時ばかりはほんたうにお腹をお立てになつて、

「素盞雄命、お前は何といふ悪い神だらう。もう一生お前とは顔も合せない。」

かう仰つて、天の岩屋の中に入つて、びつたり戸を立て、おしまひになりました。

四

日の神が隠れてしまつたのですから、世の中は真くら闇になつてしまひました。もう晝も夜もありません。高天原でさへ日の目が照らないのですから、まして下界はまるで天地のまだ開けない昔に還つたやうに、深い闇闇の中に、何千何百といふ人間の聲

「まづ天照大神が世界を照らす神々しい光明を物に象つたならば何であらう。澄みきつた鏡の面に似てゐるではないか。そこでわたしの考では、大神のおすがたに象つた鏡を作り、その光で大神をたばかり寄せる外はないと思ふ。」

かういつて、思兼の神はその外にいろ／＼と大神を誘ひ出す工夫を話しました。

そこで八百萬の神たちは、思兼の神の謀に従ひ、先づたくさん鶏を集めてしつかりなしに時を作らせ、天の安河の河上から堅い岩を運んで来て、これを鐵床にして、石凝姥命は天津麻羅といふ神を相槌にして天香山の鐵で、鏡を作りました。やがてでき上がったのは、日の形を像つた圓い鏡で、その曇りのない澄んだ光は、見る／＼高天原をばつと照らししました。また玉祖命は八尺の勾玉をとほした飾り紐を作りました。鏡と玉とは、後に三種の神器と



して残ったものです。

鏡と玉が出来たので神たちは大そう勇み立つて、なほ念のために天の香山から男鹿を一匹捕へて来て、肩の骨を抜き、櫻の枝を焼いて火に灸つて占ひを立てると、あり／＼と吉兆があらはれましたから、皆に小躍りして喜びました。

そこで大神のかくれていらつしやる岩屋の前に、神たちは皆集つて、天の香山から根こぎにして来た榊の木を真中に立て、上の枝に勾玉をかけ、中の枝に八咫の鏡を置き、下の枝には青と白のきれを下げました。さて用意ができると、岩屋の前には、夥しい篝火を晝間のやうに明るく照しつらね、天兒根の命はその前で祝詞を上げました。

やがて神たちの中からおもしろさうな笛の音が聞こりました。天の香弓といふ弓を六張ならべて、琴の様にして躍く神もありました。木と木を賑かに打合せ、拍子合せながら、みんなおもしろさうに歌をうたひますと、歌につれて、

「よこや、よこや。」

といひながら、天の佃女命といふ女の神さまが、

もうとてもたまらないといつたやうに、躍り出しました。

その風を見ると、天の香山の葛の葉を頭にまきつけて管にし、葛の蔓を纏にかけ、笹の葉を手持つておりました。そして岩屋の前に伏せた空の盥の上につて、どん／＼どん／＼足拍子を踏みながら、

「一い、二う、三い、四お、五い、六う、七な、八あ、九つ、百、千」と拍子をとつて、胸も股もまる出しにしたまま、面白さうに躍りまはりました。その容子があんまりをかしいので、八百萬の神たちも、此の頃の苦勞も何もすっかり忘れて、夢中になつて、ころげまはつて笑ひました。そのさわぎにおどろいて、鶏が聲をそろへて、コケコッコ、コケコッコと鳴き立てました。

天照大神は、岩屋の中から、高天原も引つくり返るやうな大さわ







ぎをお聞きになりますと、何事かはじまつたかと思召して、くとう我慢が爲されず、岩屋の戸を細目にあけて、そつとのぞいてごらんになりました。そして佃女命に向ひ、

「これくお前たちは何をおもしろさうに笑つてゐるのだね。わたしが岩屋にかくれてしまつては、世界は暗闇になつたであらうに、佃女は踊をおどつたり、八百萬の神たちは笑ひこけたりして、さもおもしろさうではないか。」と仰しやいました。

すると佃女命はわざと澄ました調子で、

「あなたなどはお出でにならなくとも、もう十倍も百倍も貴い神さまが出ていらつしやつたのですよ。世界は暗闇どころか、これ此の通り昔よりもつと明るく輝いてをりますよ。」と申し上げました。その時すかさず天太玉命が、岩屋の戸口にすり寄つて、八咫の鏡を大神のお目の前につき出しました。

すると、大神の光明がばつと鏡の上にあつたものですから、その照返しでそこら一面に五光がさしたやうになりました。大神はいよ／＼ふしぎにお思ひになつて、半分體を戸の隙間からおのり出しになりした。その時までそつと戸の蔭にかくれてゐた手力雄の命といふ大力の神さまが、岩屋の戸を引開けていきなり、大神のお手をとつて引出しました。その時力にまかせて引いた岩屋の戸が外れて下界に落ちました。信濃の國の戸隠山は此の時の戸だと申

します。

大神のお姿が現れると、長い闇夜が急に明けて、明るい日の光が世界の隅々まで照りわたりました。八百萬の神たちは急に明るくなつたので、目をばちくり／＼やりながら、お互ひに顔を見合せました。その顔がいかに白々と明るかつたので、口々に

「おや、おや、これは面白い、これは面白い。」といひました。

大神のお出になつた後の岩屋には、二筋の注連繩をはりわたして、天兒屋根命が、

「もう二度とこゝから中へお入りになつてはなりません。」と申しました。

五

さて大空を騒がした素戔雄命には、千座の置戸といつて、千も机を並べて、その上にのりきらないほどの澤山の品物を罰金にとり上げました。その上長



い鬚を切り、手足の爪まで剃ぎとつた上、簀笠一つで下界に追ひ拂つてしまひました。命はそれから、朝鮮へ渡り、また日本の國に歸つて、出雲の國にしばらく住んでのち、とう／＼母の女神のお後を慕つて、夜見の國へ出ておいでになつたといふことです。

聞といふことが神さまにとつても人間にとつてもどんなに厭なものであるか、光といふものがどんなに有りがたいものであるか、このお話でも分かりませう。(つゞく)





終ひにうはさばかりじや面倒く  
さくなつて  
「僕が兩國なら、うつちやられる  
ものか、こう云ふぐあひに、鐵砲  
だ」  
「なんだ、そんな鐵砲なんか」  
「鐵砲でいかなけれア、腹槍だ」  
「そんな、けちな、腹へのつかる  
かい」  
「どっこい、そう、うまく問屋で  
卸さないよ」  
「どっこい」  
「どっこい」  
と例のお父さんのこはステッ  
キの事も忘れて取組み合ひを初め  
て、どだんばだん。



例のステッキ  
とつもと きー

昨日相撲を見てきた春雄さんと  
正雄さん今朝もその場で夢中です  
「僕は兩國と千葉ヶ崎の取組みが  
一等面白かつた」  
「うん、千葉がいやがつて居る兩  
國の禪をつかんで、ぐんとつた  
とき兩國はあぶなかつたな」  
「でも、のこして、そとがけで逆  
したのはさすが兩國だ」  
「僕は西がすきだ」  
「僕は東がすきだ」  
「僕がもし千葉ならうつちやつて  
やるのよ」と盛んにやつてゐます。





春雄さんと正夫さん、倒のステツキがちやがちやしたので、兩國も千葉ヶ崎もひとぢぢみ、するとくすくす笑ふ奴があります、お父さんは上つて来そうにもないので、それでもそはつとのぞいて見ると姉さんだ。  
いきなり降りて来て、逃げようとして居る姉さんをつかまへたので、ちいさんは、  
「あら、お母さん春さんが」と、かな切り聲をはり上げて泣き出したので、こんどは本當にお父さまがスタッキ持ち出して来たので、二人ともはだしのまゝ、おもてへ一目散



下では、お母さんが、聞きつけて、  
「ちいさん、又二階で初めたよ、けさから三度目じやないか、こんどはお父さんに聞えと又叱られますから、およしなさいて、云つていらつしやい」  
ちいさん、お母さまに云いつけられて行きかけましたが、い、考へがでましたので、例のスタッキのさしてある瀬戸物の傘さしを、がちやがちや、さすと、二階のさはぎが急に、びたりと、とまつたのでおかしくなつて、くすくす笑ひました。





鏡國めぐり (長篇童話)

西條 八十

八、ダムとチー

「あやちゃんがつかまつてゐた立札には、指さしてゐる手の繪が二つかいてありました。その一つの下には「ダムの家へ」と字が書いてあり、も一つの下には「チーの家へ」と書いてありました。」

「ダムにチーだなんて、まあどんな人たちが住んでゐるんでしよう？」

「あやちゃんはすこし氣味わるくおもひながら、とにかく右のダムの立札のある路を歩いてゆきました。やがて一つの曲り角をまがると、途端にあやちゃんは

ビクッリしました。背の低い、肥つちよな、どちらもまるでおんなじ恰好をした妙な男がふたり、お互の頸に手をかけながら、一本の樹の下に立つてゐました。

「まあ！」と、あやちゃんは驚いてふたりの様子をヂツと見てゐました。この二人の名前は直ぐわかりました。なせと云ふのに、ひとりの洋服のカラーには「ダム」と縫ひとりがしてあり、片方には「チー」と縫ひとりがしてあつたからです。

二人はそれは／＼奇妙な顔をして、人形のやうにすこしも動かさずそこに並んで立つてゐました。あやちゃんがふり返つてみますと、今しがた見た二つの路はこゝへ来ていしよになつてゐることがわかりました。

いつまで／＼見てゐてもふたりは黙つて立つたなり、顔の皺ひとつ動かしませんでした。あやちや

んはあまり退屈なので、このふたりの名字はいつた何といふんだらうと、そばへ寄つてカラの裏をのぞいて見ようとしました。と、そのとき、「ダム」と書いたしるしの方の男が、いきなり聲をだしたので、あやちゃんはびつくりして後じさりしました。

「お前おれたちを人形だと思つてるなら、見賃を拂ひな。人形はたゞで見せるために作つたもんぢやないよ。失敬な。」

「さもなくて。」と、もう一人「チー」と書いた方の男が今度は口を出して、「お前おれたちを生きた人間だと思つてゐるなら、ものを云はんといふ法があるか？」

「あらごめんなさい。」

あやちゃんは小さな聲で、おとなしくあやまりました。それからごくいていねいに、



しいのでしようか？ だん／＼空が暗くなつてきましたから、どうぞ教へて下さいませんか。」

「お前は挨拶のしかたがまちがつとるぞ。」

と、訊ねました。

「人に初めて逢つたときには、まづ「ご機嫌いかど」といつて握手をするのがみちだ。」

けれども、ダムとデーはお互ひに顔を見合せて、たゞにやり／＼してゐるだけでした。そのふたりの風が、あやちゃんにはまるで小學校の生徒が先生に何か質問されてはにかんでゐる様子をつくりに見えましたので、あやちゃんは思はず、ダムの方を指さして、先生のまねをして、

「ヤッー」といふ掛聲もろとも、しつかり片々の手で抱き合ひました。さうして二人ともあいてゐる方の手を、あやちゃんの前へさしだしました。

「一番！」と云ひました。

あやちゃんはどちらの手を最初に握つたものか知らんとしばらく迷ひました。もしどちらかを先に握つて、ほかのひとりの氣をわるくするようなことがあつてはと心配しました。そこで思ひ切つてふたりの手をいちどきに握りました。

「これはけしからん。」と、ダムは早口で云つて、それなりバチツと口をしめてしまひました。

これでダムもデーもたいへん機嫌がなほつたやうでした。

「次！」と、今度はデーの方を向いて、あやちゃんが云ひました。

「ムニャ／＼／＼。」

デーは小さな聲で何か云ひましたが、何のことや

「とき／＼娘さん、お前唄が好きかい？」

と、デーが訊きました。

「え、大好きですの、——でも唄によりますわ。」

と、あやちゃんはあやふやな返事をして、

「それよりこの森のそとへ出るみちを教へて下さいな。」

「フーン、何をこの娘にうたつてきかせてやらうかな。」と、デーはひどく考へ込んだ顔をして、ダムの方をふりむきました。あやちゃんの言葉なんぞまるで耳に入れてないやうでした。

「あざらしと大工」がよからう。あれがいちばん長いから。」と、ダムが答へました。

「さうだ。ちやあ、あれをやることにしよう。ゴホン、ゴホン。」

デーはもつたいぶつた咳ばらひをして、さつそく





始めました。――

『お太陽さまが光つてた――』

あやちやんは、おもひ切つて口を入れて、

『あの、もしその唄がたいへん長いやうでございましてら。』

と、一生けんめい、ていねいに云つて、

『ちよいとその前にこの森の外へ出るみちを教へて下さいな。』

デ―はテラとあやちやんの顔を見て、ニヤ／＼と笑つただけで、澄ましてまた唄をつゞけました。

### 九、「あざらしと大工」の唄

デ―が歌つた「あざらしと大工」の唄と云ふのは、それは／＼變てこな、またおそろしくながい唄でした。あやちやんがその間に十五へんもあくびをしたほどでした。

で、その唄の大體の意味をざつと書きますと、かうでした。――

すこぶる妙ちきりんな日でした。もう時刻は眞夜なかだと云ふのに、太陽が海の上にカン／＼輝いてゐました。さうして波を出来るだけ平に美しく見せてゐました。

月はムツとした怒つた顔で照つてゐました。「太陽の奴、もう晝間がおしまひになつたのにまだ頑ばつてゐて、僕の遊びのじやまをするなんて失敬な奴だ」と、心の中で思つてゐました。

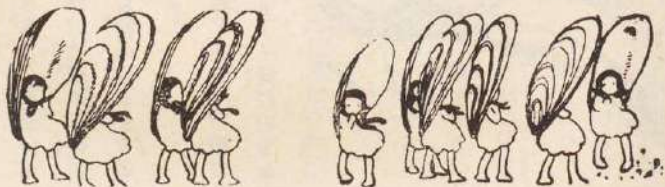
海は濡れるだけぬれて、砂はまた乾けるだけ乾いてゐました。雲はひとつも見えませんでした。なせと云ふのに、空にはひとつも雲が無かつたからです。鳥は一羽も頭の上に見えませんでした。なせと云ふのに一羽の鳥も飛んでゐなかつたからです。



あざらしと大工が並んで歩いてゐました。ふたりは砂がどつさりあるのを見てペンをかいて云ひました。「これがキレイに掃除出来たら、さぞよからうになあ。」と。

「女中が七人、七本の箒でもつて半年掃除したらこれが無くなるだらうか。」と、このときあざらしが訊きました。「多分だめだらう」大工はかう答へて熱い涙をボロ／＼こぼしました。

「オイ牡蠣君、僕等と散歩に行かないか、面白い話をしてきかせるから、一緒にブラ／＼海岸を歩かうぢやないか、手を貸し





てあげるせ。」とあざらしがそこらにみた牡蠣に言葉  
をかけました。

老つた牡蠣は、あざらしの顔をデロリと見たきり  
で、一言も口をきくせんせでした。たゞ目ばたきを  
してその重たい首をふりました。これは寢床をはな  
れるのがおつくうで厭だといふしるしでした。

けれども四人の牡蠣の子供たちは、イン〜やつ  
てきました。上着にはブラ  
シをかけ、顔を洗ひ、靴を  
きれいに磨いて、二人のあ  
とについてきました。

その後からも後からも、  
四人づゝ幾組もの牡蠣の子  
供たちがゾロ〜ついて來  
て、まつ白な波の間を飛び  
はねたり、岸へはひのぼつ



たりしながら歩いてゆきました。

一里ばかり来たところで、大工とあざらしはい、  
かげんな低い石の上に腰かけました。牡蠣の子供た  
ちは一列にならんで、をとなしくお話しはじまるの  
を待つてゐました。

「さ、これからいろ〜なお話しはじめます。靴だ  
の、船だの、封蝨だの、キャベツだの、王様だの、お

話、それからなせ海が煮えくりかへつてゐるのか、  
また豚には翼があるかないか、さうしたお話しはじ  
めます。」と、あざらしが云ひました。

「でも、もう一寸お話を待つて下さい。僕たちはあん  
まり肥つてゐるので、まだ息が切れてゐますから。」  
と、牡蠣たちが云ひました。

「ナニ急ぐことはないよ。」と大工が云ひました。牡  
蠣の子供たちは大工がかう云つてくれたのを、たい  
へん有りがたく思ひました。



「わたしたちの欲しいのは、パンが一斤と、そのう  
へに胡椒と酢があれば上等だ。ところで牡蠣君、支  
度が出来たら、ソロ〜喰べはじめよ。」と、あざ  
らしが云ひました。

「僕たちを喰べるのはごめんなさい。」と牡蠣の子供  
たちが青くなつて云ひました。「あんなに親切にした  
あとで、そんな氣味のわるいことをするのはやめて  
下さい。」

「あゝいゝ晩だ。どうだい、いゝ景色ぢやないか。」  
と、あざらしが空をばけて云ひました。

「おまへたちはよくまあわざ〜來ておくれたつた  
よ。それにすむふんとうまさうだな。」

大工は何にも云ひませんでした。たゞ「もう一き  
れおくれ、おい、これで二度も頼んだんだせ、おま  
へまさか贅ちやあるまい。」など、云つて、夢中にな  
つてムシャ〜喰べはじめてゐました。



「あゝ悪いことだな、牡蠣の子供たちをこんなに欺すなんて、こんなに遠くへつれ出したり、あんなに早く歩かせたりするなんて。」と、あざらしは云ひました。けれども大工は相變らず何とも云はず、たゞ「おやおやバタを産りすぎちやつたぞ。」などと澄まして云つておました。



「あゝおもへばおまへたちはかはいさうだ、こんなに涙がこぼれる。」と、あざらしはすゝり泣きしながらも、なるべく大きな牡蠣をよりだし、ポロポロ涙をこぼしながら、ポケットナイフで剥き剥しておました。

「サア牡蠣君、だいぶ面白い散歩をしたねえ、ドレボツ／＼歸らうぢやないか。」とやがて、大工は聲をかけた。けれども誰も返事をしませんでした。しないのも道理牡蠣の子供たちはもう残らず喰べられてしまつたあとだつたからでした。

「あたしあざらしがいちばん好きよ。だつて、あの人牡蠣の子供のことをすこしはかはいさうに思つたから。」

と、チーの唄を聴き終つたあとで、あやちやんが云ひました。



「でもあざらしの方が大工よりもよけいに喰べたのさ。」と、チーが云ひました。

「ね、あいつは泣くときハンケチを頭に當てゝゐたらう。だからいくつ喰べたか大工には勘定が出来なかつたんだ。」

「それは卑劣だわ。」



と、あやちやんはムツとして云ひました。

「ぢやあ、あたし大工の方が好き、——あの人の方があざらしよりよけい喰べてゐないつて云ふなら。」

「でも、大工はお腹いっぱい喰べたんだよ。」と、今度はダムが云ひました。

これで何が何やらサツパリわけがわからなくなりました。しばらくたつてから、あやちやんは、

「まあ、二人ともいやな人ねえ、では……。」

と、何か云ひかけましたが、この時、向ふの樹の下をデツと見つけてゐたダムが、いきなり大聲をあげて、

「ヤ、たいへん〜。」

と叫んだので、ギョツとして、自分もその方をふりむきました。

(あやちやんは、樹の下に、そも〜どんなものを見たでしょう?) (つゞく)



支那のソングの物語

楠山 正雄

犬と主人

むかし揚布といふ人が白い着物を着て外へ出ましたが、途中で夕立にあつて着物をびしょりぬらしてしまつたので、友だちの家に寄つて、こんどは黒い着物を借りて家に歸りました。すると門の前になつてゐた飼犬が主人を見るとふしぎさうな顔をしてワン／＼と吠えつきました。揚布がおこつて靴をふり上げて犬をぶたうとしますと、そこへ揚布の先生揚朱が通りかゝつて、止めていふのには、

「犬を打つのはお止し、白い着物を着て出たものが、黒い着物に着換へて来たお前がわるいのだ。かりにこの日犬が外へ遊びに出てゐる中に黒い犬に變つて歸つて来たならお前はびつくりして、大きな聲を立くらうから。」



矛と盾

人を突く矛と、矛を防ぐ盾とを一しよにもつて、町へ出て賣つてある男がいました。矛を賣るときには、

「この矛で突かれては、どんな丈夫な盾だつて、ふせぐことばできません」といひました。そのくせ盾を賣る時には、

「この盾でふせば、どんな強い矛だつて、とても通すことばできません。」といひました。

通りかゝつた人が笑ひながら、

「ではお前のその矛で、その盾を突いたらどうだ。」といひました。

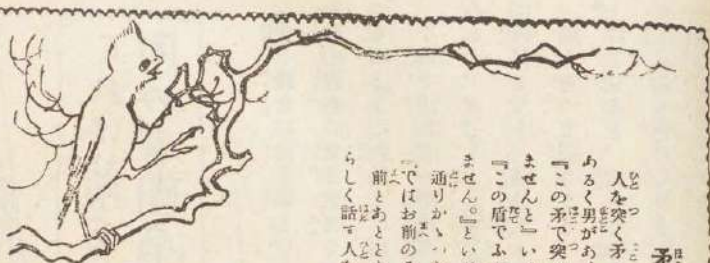
前とあととまるつきり反對したことを、平氣でどちらもほんたうらしく話す人を矛と盾のむかし話のやうだといひます。



海を埋める計畫

發掘山といふ山に精衛といふ小鳥がいました。いつも小鳥仲間に向つて威張つていふには、

「わたしはむかし人間の先祖の神農王の娘で女娃といつたものだ。或日東海の濱で遊んでゐると、津波が来てわたしたしを海の中へさらつて行つてしまつた。わたしはくやし、いから、どうかしてかたきを取つてやらうと思つて、精衛といふ小鳥になつて、毎日この通り西山の木や石ころをくはへて行つて、東海に運んでゐる。かうして今に東海を埋めてしまふつもりであるのだ。」といひました。







これは龍宮の乙姫様使  
用の唐團扇です

### 鎌倉権五郎

沖野岩三郎

昔、鎌倉に徳兵衛といふ爺さんがありました。鶴ヶ岡の銀杏の新芽が青くなつた頃、由比ヶ濱へ、いつものように魚釣りに出かけました。

小舟を岸から一町程離れた所へ出して釣を垂れてゐると、グ、グ、と釣糸を引張るものがありました。「何だらう？ 随分大きな魚だぞ！」

斯う言つて爺さんは、うんと力を腕に籠めて竿を上げて見ると、大きな赤鯛が、キラ／＼と鱗を光らせて釣り上げられました。徳兵衛爺さん大喜びで早速それを籠に入れて、又

た釣糸を海へ投げ込むと直ぐ、グ、グ、と釣糸を引張るのです。引上げて見ると大きな赤鯛です。「まあ、何といふ嬉しい事だらう、斯うしてお正午まで釣つたなら、どうしても百尾は釣られる、旨いぞ！ 百尾の赤鯛を持つて歸つて婆さんを吃驚させやらう！」

爺さんは斯んな事を心で思ひ乍ら、何尾も／＼赤鯛を釣りました。そして丁度二十七尾釣つた時、もう爺さんの腕は、へな／＼になつて了ひました。「もう駄目だ、此上赤鯛を釣上げたなら、私の腕が

肩の所から抜けて、ぶら／＼になる。もう止さう……そして早く家へ歸つて、婆アさんを喜ばせてやらう」徳兵衛爺さんは、釣糸を竿に捲きつけて、舟を岸へ漕ぎ寄せました。それから爺さんは二十七尾の赤鯛を入れて籠を肩に引つけて一町ばかり砂濱を歩いたのですが、どうも右の腕が痛くて致様が無いので、砂の上に籠を措て暫く其所で休んでゐました。所が其日はボカ／＼と暖い天氣で、爺さんの寝て居る砂は、太陽の光りでホコ／＼の炬燵のやうに温かになつてゐましたので、いつの間にか、爺さ

んは宜い氣持になつて、ぐつぐつと寝込んで了つたのでした。そして面白い夢を見ました。夫れは徳兵衛爺さんが赤鯛を釣るのに上手だからと云つて、源の頼朝公から召出されて、立派な武士になつたといふ夢でした。最う今までと違つた立派な武士





だから、烏帽子を被つて、直垂を着て、長い刀を腰にさして、そして手に釣竿を握つて、

「おうーい、赤鯛々々！ 早く此の釣糸の尖にある餌を咬め！」と赤鯛に號令をかけますと、

「はッ、畏まるりましてございます。」と云つて、大きな赤鯛がバクリと其の釣針を咬むのです。

あんまり面白いので、爺さんは夢中になつて、何尾も〜赤鯛を釣つてゐると、お終ひにボキン！ と釣竿が折れたと思つたので、吃驚して眼を覺すと、此れはまア何とした事です。いつの間にか海の中から大きな猿のやうなお化が五疋出て来て、折角爺さんの釣つた赤鯛をボリ、ボリ、と骨ごと食べてゐるぢやありませんか。

「さア大變だ！」と思ひましたが、此まゝ起きて行つたなら、お化に噛み殺されると思つて、其儘寝込んだ風をして心の中で一生懸命にお化を驚かしてやる工夫を考へてゐました。すると一疋のお化が斯んな事を言ひました。

「おい、君達は此の日本中で何が一番恐ろしいかー？」

「狼が恐ろしい。」と一疋のお化が言ひました。

「狼は海の中に入つて來られないよ。だから恐ろしくはないさ。」と他のお化が言ひました。すると又た一疋のお化が、

「鯨だ、鯨が一番恐ろしい。」と云ひました。

「鯨は陸まで追つかけて來ないから恐ろしくは無いよ。」と一番小さいお化が言ひました。

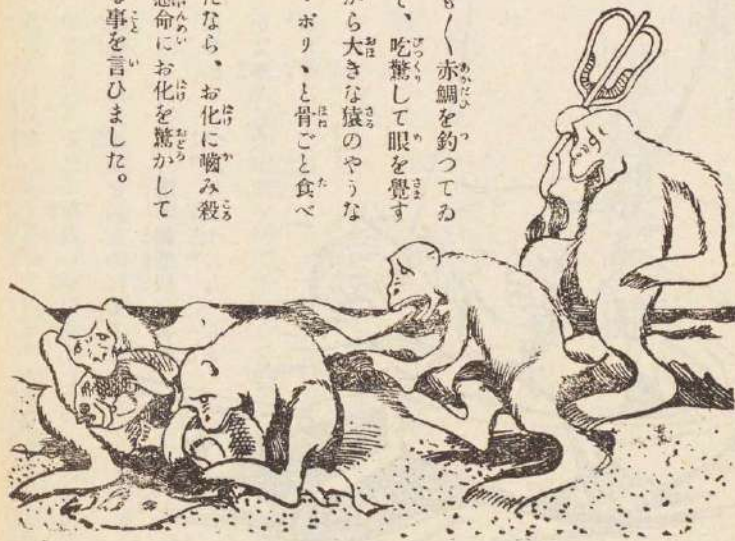
「恐ろしい者がある、夫れは鎌倉の大佛だ、高さが九間もあるよ。」と一番能く肥えたお化が言ひました。

「大佛様なんか恐ろしいもんか、坐つたまゝ腰が抜けて立たれないんもの。」と、一番年を老つた疥せたお化が言ひました。

五疋のお化は暫く黙つてゐたが、年寄のお化が思案顔に斯んな事を言ひました。

「狼より鯨より大佛様より、もつと恐ろしいものがある。それは鎌倉権五郎ちや、鎌倉権五郎は戦争に行つて、敵に右の眼玉を弓で射たれたが、其の矢を引抜きもしないで、直ぐ様自分を射つた敵を尋ね出して射殺したさうな。何と偉い男ではないか。」

四疋のお化は皆な聲を合せて、





「それは偉い男だ、そんな男が此所へ来たなら君達はどうする？」と小いお化が言ひました。

「そんな偉い男に來られたなら、生命からく逃げるよ。」と四疋のお化が一度に言ひました。それを聞いた徳兵衛爺さん、宜い事を聞いたものだと思つて、むくり！と起上るや否や、

「おうーい、遠き物は音にも聞け！ 近き者は眼にも見よ、我こそは源家の家臣、鎌倉権五郎景政なるぞ！」と大聲で言ひました。

すると、お化は皆な一目散に海の中へ逃げ込みました。後には唐團扇のやうなものや、玉だの珊瑚だのが落ちてゐました。

徳兵衛爺さん大喜びで早速それを拾つて家へ持つて歸りました。そして婆アさんに其品物を見せると、婆アさんはつくんとそれを見てゐたが、

「先ア、爺さん、此の唐團扇は龍宮の乙姫さんが持

つてゐたのですよ。」と言ひました。  
「さうだ、能く繪本で見た。これが乙姫様の團扇に違ひない。」爺さんは大變に喜んで、早速それを家の表にぶら

下げて、小い紙ぎれに、

「これは龍宮の乙姫様御使用の唐團扇です。」と書いて貼つて置いたので、さア鎌倉の町中の大評判になりました。遂には其頃扇

ヶ谷に居られた殿様まで態々お馬に乗つて其の團扇を見に出でになりました。

徳兵衛爺さんの



お隣りに損兵衛爺さんといふのがありました。俺も一つ徳兵衛爺さんの真似をして、お化を嚇かして、唐團扇より、もつとく宜いものを奪つてやらうと思つたので、或る暖い日の朝、町のお魚屋から鯛だの鯉だのを十尾ばかり買つて來て、それを籠の中に入れて、其籠をぶら／＼と提げて由比ヶ濱へ出て行きました。そして故意と寝た風をして砂の上に轉んでゐました。暫くすると海の中から又た五疋のお化が出て來ました。

今日はお化の一疋が美しい／＼金の冠を冠つてゐました。夫れは龍宮の乙姫様の冠でした。それを見

た爺さんは、  
「さアしめた！ 今日金の冠だぞ……」と思つたので、周章でムクリ！と撥ね起き、

「遠きものは音にも見よ……近きものは目にも聞け……我こそは源家の家臣……鎌倉……」とまで言つ

つてゐたのですよ。」と言ひました。

「さうだ、能く繪本で見た。これが乙姫様の團扇に違ひない。」爺さんは大變に喜

んで、早速それを家の表にぶら

下げて、小い紙ぎれに、  
「これは龍宮の乙姫様御使用の唐團扇です。」と書いて貼つて置いたので、さア鎌倉の町中の大評判になりました。遂には其頃扇

ヶ谷に居られた殿様まで態々お馬に乗つて其の團扇を見に出でになりました。

徳兵衛爺さんの

たが、其時お化の一疋が、腹を抱へて笑ひ出しました。

「音にも見よだつて、ハ、ハ、ハ、ハ、目にも聞けたつてハハ、ハ、ハ、」

と笑ひ乍ら言つたので、他のお化も皆なワハ、ハ、と笑ひました。

損兵衛爺さん周章で、「鎌倉権五郎だぞ！」と言はうとしました







とろろ薯 (推薦童話)

長岡 襄

びとろ びとろと

空から見てた

誰も見てない

晝飯時だ

鳶 とろろ薯

とつて食べた



四〇

ろ……」

と口々に言ひました。

損兵衛爺さんは死物狂ひになつて着物を脱ぎ棄てたまふ丸裸で家へ逃げ歸りました。

其晩損兵衛爺さんは、夢を見ました。

その夢は、斯ういふのでありました。

龍宮の門の側に、爺さんの着てゐた古い着物が吊されて、其下の立札に、

「これは鎌倉海老の着て居た着物です。」

と書いてありました。多勢のお魚が集つて来て、珍らしさうにそれを見てゐました。殊に目立つたのは大きな章魚入道が龜の脊に乗つてそれを見に来たのでした。(ありふれた話その二をばり)

が、どうしたものか、

「鎌倉海老だぞ！」

と言つて了ひました。

さア大變です。お化は五疋共爺さんに飛びかゝつて来て、

「鎌倉海老だつて、大きな海老だなア、食べる、食べる」



懸賞金一萬圓

前月のツバキ

12

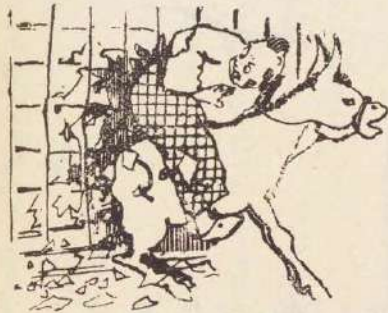
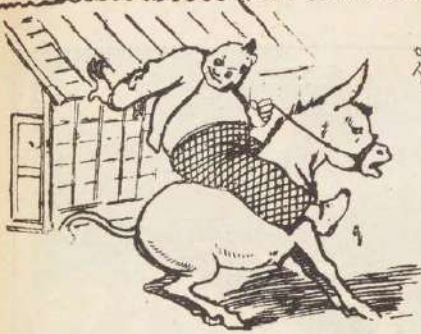
それでも、やめずにぐんぐんと  
すきりしてあましたが、丁度其所  
にあつた南洋の蘭の針の標とながつ  
た葉のさが薩馬のお尻へぶつりさま  
つたので、こんどは薩馬がおどろいて  
前へ走りだした。

11

しまひによその庭の中へ入つて  
そこにあつた温室へぶつかつて  
ガラスを目茶々々にこわしたので、  
平さんさもなつぷしました。

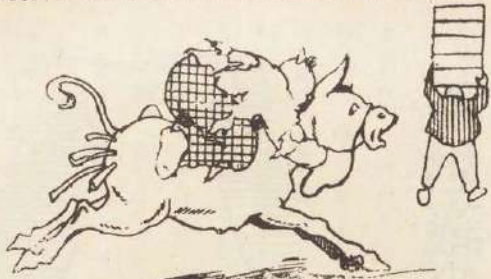
10

やうやく薩馬があつさりしたの  
で、平さんは助かりましたが、こ  
んどはどうしても前へすすみま  
せん。



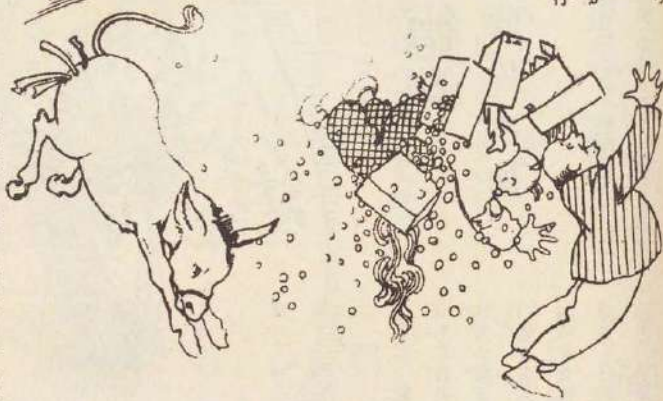
13

平さん又いや前つたまへかざりつ  
いた。薩馬はいたし、苦しいし、  
ややくそになつて、菓子やさんが  
頭の上へうんとこさ箱をのせて行  
くらしいのでびんとはれた。



14

薩馬「どうだ、こんどはうまくいった  
らう。」



15

平さん謝罪はとられる、サマ  
とお菓子代をとられる、おまけ  
にハンキでべたべた、けがは

するし、荷物も目茶々々、たうと  
う一文なし、さんぐのしまつ。



(きはを)





# 不思議の徳利

齋藤 佐次郎

東京がまだ江戸といつてゐた時分のこと、麴町の四丁目「龜屋」といふ大きな呉服屋さんがありました。幾代もつゞ

「私は道具屋ですが、道具の見世を出したいと思ひますので暫くお見世先きを拜借させていたゞきたうございます。」といひました。

そこで、若衆は番頭さんのところへ行つて、相談しましたが、折角来たものだから見世先きでは困るが、倉の前ならいいだらうといつたので、そのことを老人に話してやりました。老人は大變喜んで、日がほか／＼照つてゐる倉の前へ行きました。ところが其處は、恰度今しがた呉服の荷をといた後なので、塵だらけになつてゐましたから、若衆が、

「お爺さん、箒を貸してやらうか。」といひました。

「いえ、それには及びません、私が持つてゐますから。」と、老人は答へました。でも老人は、箒など持つて來てゐる様子がないのです。それに第一道具屋だといふのに、たつた一つ徳利を持つて來てゐるだけで、外に何一つ道具らしいものがありませんでした。

その内老人は、手に持つてゐた徳利に向つて何か口の中で唱へ事をしてゐましたが、徳利の口へつゝと手をやつたかと思ふと、中から一本の箒を出しました。それからその箒を持

四四

いた大家ですから、倉がいくつあつて、見世には若衆や番頭さんが大勢ゐました。

この龜屋の主人の佐平といふ人は、まだ年の若い男でしたが、大變なさけ深くて、人を助ける事を何よりの樂しみに思つて、困つてゐる人があつると、どんな遠方でも出かけて行つては物をやつてくるといふ程の人でした。ですから、近所の評判も至つてよく、見世も

なか／＼繁昌してゐました。

ある日のこと、この「龜屋」の見世先へ一人の見なれない老人が來ました。年のころは六十二三位のやうで、丈の高い白髪の老人でしたが、手に奇妙な徳利を一つ持つてゐました。

「一寸お頼みしたい事があるのですが——」といつて、老人はあと何にもいはず立つてゐました。見世の若衆が出て行つて、「何の用ですか。」とさくと、

つて、周圍に散ばつてゐる塵をすつかり掃取つてしまひましたが、今度はまた、塵を二枚徳利の中から出してそれを地面に敷きました。

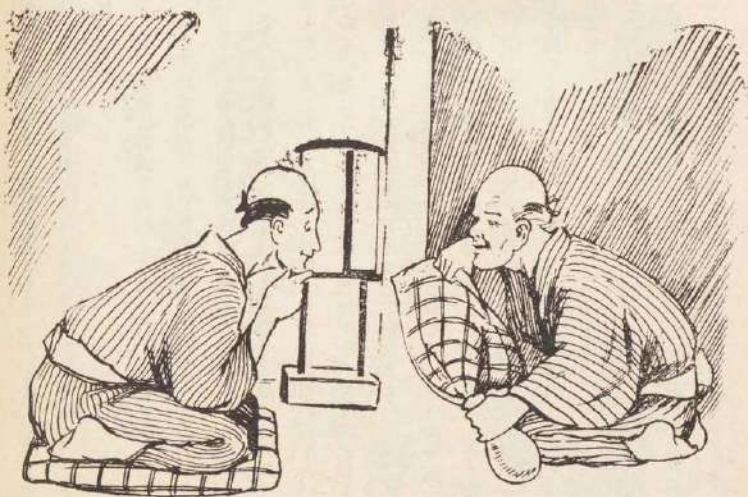
つゞいて老人は、手箱や、花活けや、置物などの、いろいろの物を後から後から引出して、塵の上へすらりと並べましたが、すつかり見世らしくなつたので、自分もその中に坐つて日向ほつこしながら、氣持ちさうに往來をながめてゐました。麴町四丁目といへば、その頃でもなか／＼人通りの多い處でしたから、忽ち人だかりがして一つ二つと次第に品物が賣れて行きました。

二

その内にタカになりました。だん／＼暗くなつて來たのでもう賣れさうな見込もなくなつたので、道具賣りの不思議な老人は、立上つて賣残りの道具を藏ひにかゝりました。今度、は一つ一つ徳利の中へ入れるのです。すつかり徳利の中へ藏ひ入れてしまふと、老人はまた「龜屋」の見世先きへ來て、「大きにお邪魔をいたしました。いろいろ有難うございました。」と禮をいって、歸つて行きました。

四五





四六  
 龜屋の主人の佐平は、見世の若衆から老人の不思議な話を聞いて、自分でも出かけ行つて見ると、成程不思議なので驚きました。それで、是非あの奇妙な徳利のいはれを尋ねて見たいと待ち構へてゐた處ですから、すぐと後を追ひかけて行つて、

「もし、御老人、少々お待ち下さい。」と、いひました。老人は何事かと思つて立止りました。

「私は先刻からあなたの不思議な徳利を見てをりましたが、あんまり不思議なのに呆れてゐたのです。どういふ譯でその徳利からいろ／＼のものが出るのか、そのいはれを話して下さい。さう譯には行きませんか。」と、佐平はききました。

老人は困つたやうに、黙つてゐましたが、

「そんなに仰しやるならお話しませう。しかし、人は、人通りが多くてゆつくり話も出来ませんから、私の家までお出でになりませんか。ごき其處の番町なのですから。」と、いひました。そこで佐平は喜んで老人の後をついて行きました。

三

不思議な老人の家といふのは、淋しい通りをいくつもく

曲つて行つて、太い松の樹が溝に茂つてゐる處にありました。古い倒れかゝつた門の扉を開けて入ると、玄關まで広い庭になつてゐました。もう暗いので、よくは分りませんでした。が、苦が一面に生えてゐる様でした。そして、家はまるでお屋敷のやうな古い大きな構への家でした。佐平は老人について座敷へ上りましたが、こんな大きな家なのに、道具らしいものは一つもなく、お寺の様にがらんとしてゐます。召使ひの者も一人もありませんでした。

「さア、この通り誰もゐないから、遠慮なくして下さい——今、燈火をつけますぞ——」

老人はかういつて、例の徳利の中から行燈を出して、それに火をつけました。それから續いて徳利の中から座布団を出したり、煙草盆を出したり、お茶やお菓子を出したりして佐平をもてなしました。

佐平は狐にでも化かされてゐるのぢやないかと思つて、氣味が悪くなつて來ました。しかし老人の方では落ちつき拂つて顎鬚を撫でながら、ほつり／＼と話し出しました。

「御覽の通りこの徳利の中から何でも思ひ通りの物が出て來

るのです。欲しいと思ふものを心の中であつたやうで、出るのです。私は、この徳利を長い間持つてゐましたが、もう人に譲らなければならぬ時が來たのです。それで此の間うちから此の徳利を譲らうと思ふ人を探してゐたのですが、未だに探しあたらなかつたが、今日あなたに遇つたのを幸この徳利を貰つてくれませんか。」

佐平には全く思ひがけない話です。しかし、こんな不思議な徳利をもらはないのは損だと思ひましたから、こゝろ／＼して、「それは有難い事です、是非頂戴させて下さい。」と、いひました。

「貰つて下さるか、それで私も漸く安心しました。ついでにはあなたにも何か望みがあるでせう。どんな望みか知らないが兎に角この徳利に向つて願ひをいつて見なさい。どんな事でも叶ふのです。」

佐平は何ういふ願をいつたものかと暫く考へてゐましたがその内に決心がついたと見えて、

「私はお金に困らず暮してをりますので、これといつて別段ほしい物はありませんが、たゞ一つ、見世を繁昌させる爲め



に随分忙しく暮りましたので、日本國中の名所を見て歩きたいと思つてゐながらとうとう今日まで出来ませんでした。それが、まことに残念です。支那や天竺までもとは思ひませんが、どうか一生の内に一度日本中のあらゆる名所舊跡を見て死にたいのが私の望みです。」

老人は佐平の話を聞いて、笑ひながらいひました。

「そんな事だつたら、まことに容易い事だ。この徳利の中へお入りなさい。すぐと覓られます。」

しかし、佐平にはそんな小さな徳利の中へ人間一人がどう考へたつて入れさうにも思へませんから、どうしたものかと、まごついてゐました。

「私のいふことを疑はずに、先づ左の足を徳利の口へ入れなさい。自然とお前さんの身體が入るか



ふ事だせう。佐平はびつくりして、あたりをきまよう／＼見廻しながら、

「一體、こゝは何處だらう」と、云ひました。

向の方で、お百姓が畑を耕してゐます。佐平はそこまで行つてきいて見ました。

「こゝは江戸から十三里ある八王子の在だが、一體お前さんは何だつて、そんなにびつくりした顔をしてゐたんだね。まるで、お狐様にでも化かされたやうな様子をしてゐるぢやないか。」といつて、お百姓はじろ／＼見てゐました。

「へエ……、八王寺の在ですか。不思議だなア。」

佐平は、自分はまだ夢を見てゐるんぢやないかと思つて、きよ／＼と立つてゐましたが、お日様は照つてゐる、雲雀は囀つてゐます。どうしたつて夢ではない、本當のことです。そこで佐平は、びつくりして江戸へ歸りました。

八王寺街道の十三里の道を歩いて、漸く江戸へ着いた時には、日がとつぷりと暮れてゐました。佐平は四谷見附へ入つたので、「やれ／＼」と思ひながらほつ／＼と思つきました。

ら。老人にいはれたので、佐平はためしに徳利の口へ片足を持つて行つて見ました。と、奇妙にもスル／＼と入つてしまひました。そこで、こんどは右足を入れると、これも諍なく入つてしまひました。

「おやッ、兩足とも入つてしまつた。これは聞いた。」と、いつてゐる間に佐平の身體はすつほりと徳利の中へ入つてしまひました。

「どうです、中の景色は。」と老人がきくと、徳利の中から「あゝ、何といふいゝ景色でせう。おや海が見えます。山が見えますよ。こゝは品川の宿ですね。それでは先づ東海道の上三十三次から旅をはじめるといたしませう。」

と、佐平の答へる聲が聞えました。

さて、佐平はそれからどうなつたでせう。

四

佐平は日本國中を歩いて、名所といふ名所を見物してしまつたので、徳利の中からひよいと出ました。そこは菜の花が一ぱい咲いてゐる廣い畑の中でした。自分ではあの不思議な老人の家にゐるとばかり思つてゐたのに、まアどうしたとい



見ると、お濠端の土手にはいつも變らず古木の松が茂つてゐますし、お濠の水は眠つてゐるやうに澄んでゐました。

やがて見附を過ぎると、軒並み藏造りの家が並んでゐますが、どの家も大きな格子戸を下して燈火がついてゐました。

「さて、やつと麴町四丁目へ来た。今夜は久振りに家へ歸つてのつくり休めるわい。」と、佐平は嬉しうに獨言をいひながら疲れた足を引すり引すり歩きました。この時、佐平は不思議な思ひがしました。といふのは、たしかに四谷見附を入つたのですから、自分が住みなれた麴町の四丁目だと思ふのにどうも違つた處のやうな気がしてならないのです。

「不思議だなア。」と思ひましたが、兎に角自分の家へさへ着けば、すつかりの事がわかるのだと思つて、佐平は道を急ぎました。けれどいよく不思議です。あの幾軒も土蔵を建てつらねた自分の家が見當らないのです。道端に目印の柳の樹が立つてゐるので、たしかに此處だと思ふのに、そこには自分の家の跡方もなく、見た事もない間屋らしい家が四五軒立つてゐます。柳の樹も若木であつたのが、すつかり太い古木になつてゐました。

佐平は何が何やらさつぱり分らなくなつてしまつて、自分ながら、氣でも狂ふのぢやないかと思ひました。

そこで佐平はいつまでも立つて見えました。でも、どうしても自分の家が見當らないので、眞青になつてふらふら歩きました。と、「佐野屋」といふ燈火のついた實屋さんがありました。恰度その家の入口の處に一人の番頭さんらしい男が立つてゐたので、

「もし、一寸お尋ねいたしますが、この邊に龜屋といふ呉服屋のありますのを、御存知ありませんか。」と、きいて見ました。男の人は、ちつと考へてゐましたが、

「知りませんね、そんな家はありませんよ。」といひました。

「そんな筈はないのですが——」

「いえ、たしかにありませんよ。私は麴町に住んで十五六年にもなるんですが、そんな家は知りません。」

「不思議ですなア、いえ、でもたしかに龜屋がない筈はないんです。」

番頭さんは、佐平があんまりくどいふものですから、變な男だと思つたのか、少し怒つたやうな顔をしましたから、

「え、その龜屋の事について面白い話があるのですが、あなた御存知ありませんか。」

佐平が氣を失つたやうに返事もしないで、茫々と突立つてゐましたので、生藥屋のお爺さんは佐平が何にも知らないものと思込んで、また話しました。

「他人様の家の潰れたのを面白いなどといつては相済みませんが、そのお尋ねの龜屋の主人といふのは随分な變り者でしたよ。中々深切な人で近處でも評判のよい人でしたが、どうした事が、ある日のこと、見世先へ汚い服装をした爺さんが徳利を一つ持つて出て、道具屋の見世を出したといふので見世先きを貸した所が、これが手品遣ひか何かでしてね。徳利の中からいろんなものを出すのですから、不思議に思つてその徳利を見せてくれといふと、その爺さんが一しよに自分の家へ來いといつたので、龜屋さんは後をついて行つたのださうです。所が、それなり歸つて來ないので大騒ぎをしましてね、家中手分けをして捜しましたが、どうしても行方が分らないのです。そのまゝ五六年たつてしまひましたが、どうも家の潰れる時は仕方のないもので、悪い番頭が主人

佐平は仕方なく、禮をいつてまたふらふら歩きました。と、今度は「塚屋」と書いて生藥屋があるのが目に入りました。この家だけはまだ見世が開いてゐて、八十位のお爺さんが燈火の下にはつねんと坐つてゐました。この生藥屋は佐平の見覚えのある家でした。さう思つて見るせるか、見世に坐つてゐるお爺さんも見た事のある人のやうでした。

佐平は、さつそく生藥屋の見世へ入つて行つて、

「一寸お尋ねいたしますが、この邊に龜屋といふ呉服屋さんはありませんでせうか。」とききました。

「左様ですね、それはすつと昔のことではありませんかね。」お爺さんは首をかしげて、目をつぶつて、ちつと昔を思ひ出す様に考へてゐましたが、

「さういへばありましたよ。何でも昔、恰度私の子供の時分にこの麴町四丁目に龜屋といふ呉服屋さんで萬家がありました。お氣の毒に潰れてしまひましたよ。」といひました。

「何ッ、潰れてしまつたのですか。」と、いつたきり佐平は後の言葉がでませんでした。



のるないのをつけ込みさんぐ、悪い事をしたので、それから間もなくたうとう滅茶々に家がつぶれてしまひました。それはまだ、私が子供の時のことです。それから七十年も

前の事ですよ。」

佐平はあんまり驚いた後なので、自分が家を出た後の精しい話をお爺さんから聞かされても、もうそれ程驚きもしませんでした。

「あ、そんな譯でしたか。それで家が見當らないのですね。いやいろ／＼と御深切に有難うございました。つかん事を伺ひますが、それではあなたは「堺屋」の彌左衛門さんですか。」

かういつて佐平がきくと、お爺さんは一寸驚いたやうな顔をして、

「へエ、左様ですが、あなたはどなたですか。」

「私は龜屋の主人でございます。」

「エッ、龜屋さん、これは驚いた。まア、どうなすつたのです。すつかり年をおとりになつて、今まで何處にゐらしたのです。」

佐平は、すつかり年をとつてゐました。この生薬屋のお爺



をあらましました。

生薬屋のお爺さんは呆れて、よ／＼した目を丸くして聞

いてゐました。

「あ、本當に夢の様です。もう家がなくなつてしまつて見れば、今更この土地に來た處が仕方がありません。徳利の中から生れたのが八王寺の在ですから、そこを生れ故郷として私はこれからまた八王寺へ行つて、何か商賣をして暮すこと、しませう。」

佐平は最後に悲しさにかういつて、お爺さんに別れをつけて出て行きました。

さて、それから佐平はどうなつたでせう。

その後、餘程たつて、ある人が八王寺へ行つた處が、町の中に大きな宿屋があつて、そこに佐平の姿を見たといふことです。

して見ると、そこで宿屋を開いたものと見えます。中々繁昌してゐて、屋號には「徳利の龜屋」と書いてあつたさうです。(なほり)



さんに負けない位のお爺さんになつてゐたのです。

「お話をすれば長くて際限がありませんから、極くかいつまんでお話ししますが……」

といつて、佐平は不思議な老人につれられて行つてからの話





## 大豆の木

昔昔、ある正直な老爺さんが、山に薪を採りに行きました。

お釜になつたので、お辨當を済ませようと、開けて見ましたところ、御飯もお菜も無くつ、中には、大豆の大豆が一粒進入てゐるさうでした。

「老爺さんのそんなさうかいにも程があるが、しかしまあ、これア何といふ大きな大豆だらう。」

不思議さうにして、その大豆を見てなりました老爺さんは、嫌らなく、お釜をゆきにして、地方、お腹をべこべこにさ

して歸つてまゐりました。

「老爺さん、今日のお辨當ほどうしたのだん、中にヤア、大豆粒が一つきりだつたが。」

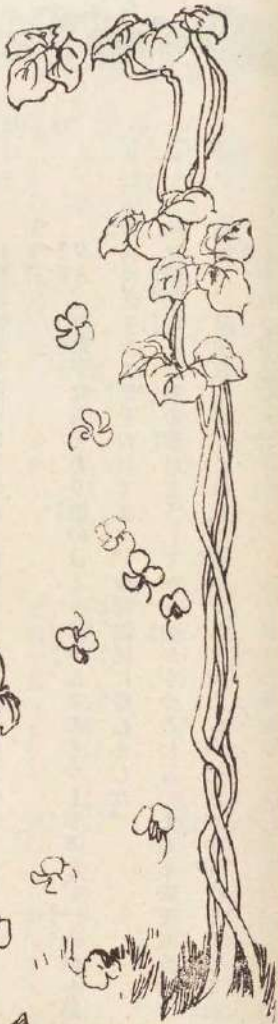
と老爺さんが言ひますと、老婆さんは、ひどくたまげました。

「まあ、そんな筈はないんですがね。……まさか、大豆がお辨當を食べてしまふわけもありませんし、……」

かう言ひながら、老婆さんがお辨當箱を開

## 諸説 傳説童話

藤澤衛彦



けて見ましたら、大豆の大豆には、もう、芽が生へてなりました。

二人は大豆に驚いて、垣の根方に植ゑて置きましたら、日一日大きくなり、終には大きな大豆の木になつて、深山の花が咲き、収穫時には、千石からの大豆が取れました。

それから其村は、千石村と言はれましたが、不思議な事に、種子になる大豆なのは、たった一粒で、あとは普通の小粒の大豆でしたから、老爺さんは其一粒を大層大切にしておりました。

ところが、隣の悪い老爺さんがそれを聞い



て珍しい種子の大豆大豆を見せたくれろと借りて行つたきりかへしませんので、正直老爺さんが催促に行きましたら、

「あの大豆の大豆め、途方もない悪戯者で、たうとう圃藪裏の中に轉げ込んで大火傷、それきり床について、こんなに瘡でしまった。」

と言つて、普通の煎大豆をよこしました。ところが、夏になつて、正直老爺さんが、悪い老爺さんの畑に行つて見ますと、大きな大豆の木が出来てゐて、それには珍しい花が

咲いてなりましたので、大變に口惜しがつて、涙を零し出しました。

すると、大豆の木も悲しがつて、ぼろぼろと、深山の花を皆、涙のやうに落してしまひましたので、それつきり、大豆の木には實がなりませんでした。

(能登の話)





# 猿の王様と湖水の鬼

三宅房子

お釋迦様がお弟子たちをおつれになつて、田舎の方を廻つていらつしたときのことです。

夕方、お弟子たちとある池のほとりで休んでゐらつしやると、一人のお弟子が池の中にはえてゐる葦をぬいてきて、お釋迦様に尋ねました。

「お釋迦様この邊の葦はどうしてかう中がうつろになつてゐるのせうか」

「お、弟子たちよ。これには面白いわけがあるのだよ」とおつしやつて次のやうなお話をなさいました。

すつと昔、この邊は大きな大きな森で、晝でもまつくらなほどでした。そこにはまた、何千といふたくさんな猿が棲んでゐました。

ある時、八千といふ猿がひとかたまりになつて、王様の猿につれられて、森の中を一日歩き廻つてをりました。

それがちやうど眞夏のことでしたから、いくら森の中でもたまりません。八千の猿どもは喉がひからびるやうにかわいてきました。どつかに水がないものかと思ひ思ひしてゐるうちに、うまいぐあひに美しい湖水にゆきあひました。

きれいに澄んだ冷たさうな水を見れば、誰でもいきなりとんでいつてぐいぐい飲みさうなものです。誰一人さうする者もありませんでした。

それは日頃王様の猿から、

「この邊の湖水には鬼がゐるから、めつたに水を飲んで危ないぞ」とくれば、も言はれてゐるものだから、おとなしく王様の見えるのをまつてゐました。

「王様、この湖水ははじめのようですが……」

王様が見えるなり、猿のうちの口ききが申しました。

「あゝさうか、それではしばらくお待ち」とおつしやつて、王様はひとり何か考へて湖水のふちをお歩きになりました。

さうしてしばらくすると、お弟子たちの方をおむきになつて、おつしやいました。

「ごらん、こゝにはいろんな獸が湖水へ行つた足跡がたくさんあるだらう。だけど、獸が湖水から歸つてきた足跡は一つもないよ。これでよくわかるだらうが、こゝにはきつと鬼がゐるのだよ」



猿どもはなるほどと感心しました。

「お前達はすのぶん苦しからうが、もう一寸の間お待ち。そのうちに何かよい思案も出るだらうから」猿どもはおとなしく湖水のふちにしがんで、王様のお命令を待つことにしました。

湖水の鬼の方では、猿どもが今にも水を飲みにくるだらう。きたら一呑みに呑んでやらうと思つて、湖水の底に沈んで待つてゐました。ところがいくら待つても、待つても猿どもはやつてこないものですから、とうとう辛棒しきれなくなつて、自分の方から水の上へ出てきました。

それはまあ何といふ恐ろしい姿でせう。大きな口からは二本の牙をむき出して、誰でも彼でも、こゝへ水を飲みにくる奴はかたつばしから喰つてやるぞといふやうな顔をしてゐました。また、胸や腹はまつ背で、手や足はまつ赤で、それが魚の鱗のやうにしていひました。

「ねえ、いらつしやいよ、いらつしやいよ。広い印度にだつて、こんな美しい水はございません。この水は深い岩の中にかくれてゐる大きな泉から湧いてくるのです。この水をおあがりになれば、どんなにつらいことでも、どんなに苦しいことでもさらり



と忘れてしまひますよ」すると、王様の猿がおちつきはらつて、

なつて、てか〜光つてゐました。

ところが、鬼は見かけによらぬやさしい聲でいひかけました。

「あなたがたは、どうしてそんなところへちつと坐つてゐらつしやるのですか。あなたがたは一日森の中をお歩きになつて、喉がかわきはいたしませんか。どうしてこゝへ降りてきて、この冷たい水をたんとお上りにならないのですか」

鬼はまた一段と聲をやさしく

「なるほど、お前のいふとおりこの水を飲むと、どんなにつらいことでも、どんなに苦しいことでもさらりと忘れてしまふだらうよ。それはそのはずだ。お前はこの水を飲みにくる者をかたつばしから喰べてしまふのだもの」と、おつしやいました。

湖水の鬼はうまく騙してやらうとたくらんでゐたことが、すつかり王様に見つかつたものですからもうぶり〜おこつていひました。

「なるほど、己はお前のいふとおりこの湖水へ水を飲みにくる奴等をかたつばしから喰うのだお前でも、お前の手下でも、ほら、その土手にひきがへるのやうにしがんでゐる八千の手下どもでも片つばしから喰つてやるぞ」





「どうしてお前さんなんぞに一人だつて喰はれるものですか」と、王様の猿は笑ひながらおつしやいまして。

「何だと、お前たちは水を飲まなければ死んでしまふだらう、水を飲みきたら己に喰はれるだらう。どつちにしても、もうお前たちの生命はないもんだ」

鬼はどなるように

にいひました。

「まつたくです。

私どもはこの上水を飲まなければ死んでしまひます。

「ただどお前さんのご心配はご無用です。私どもは水が飲みたければ、な



にも湖水まで降りて行かなくとも、湖水の方から、私どもの方へ上つてきますよー

さういつて、王様は手下の猿にいひつけて草を一本とらせました。そしてありつたけの力をおこめになつて、草の中をふーとお吹きになりました。すると、中の節がひとつも残らず吹きとばされて草の中はすつかりうつろになつてしまひました。

かうして一本々々草の節をぬいて行かれました。

が、八千といふたくさんの手下にすつかりゆきわたるまでには、たいへんでまどりますから、王様の猿はまたお考へになつて、こんどは、

草よ、草よ、湖水の草よ、

大きい草は、大きいように、

小さい草は、小さいように、

一本残らずうつろになれ、

一本残らず、うつろになれ。

な草は一本残らずうつろになつてしまひました。

「さあ、お前たちはめい／＼このうつろになつた草を一本づゝおとり」といつて、王様は自分のもつてゐる草の一方のはしを口につけて、一方のはしを水につけて、水を吸ひあげられました。

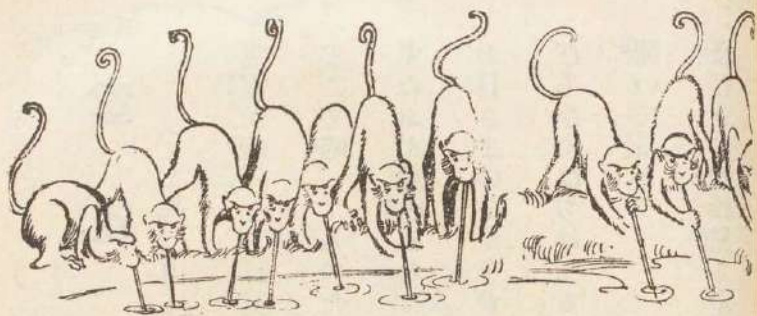
八千の手下どもは、王様にならつて一せいにめいめいの草をもつて水を吸ひました。冷たい水は、ころよく猿どもの喉をうるほしました。

王様の猿はかうして、また手下どもをつれて森の奥へと行きました。

これを見てゐた鬼はおこつて、おこつてまつ赤になつて湖水の底へ沈んでゆきました。

それから、いく年も、いく年もたつてうつろの草はだん／＼方々へひろがつて行きました。

草の莖がうつろになつてゐるのは、かういふわけですと、お釋迦様はお話しになりました。(なはり)



かう歌ひながら、湖水のふちをお歩きになりました。手下どももその後について、「草よ、草よ」と同じことをいつて、湖水のふちを歩きました。何しろ八千といふ猿が「草よ、草よ」といつて湖水のふちを廻つたものですから、鬼の方ではすつかり驚いて眼を白黒させてゐました。その間にそこにはえてゐたたくさん





早く走りませう  
兄さん兄さん

## 雲雀

若山牧水

雲雀が啼いてるね兄さん  
どこで啼いてるのだらう  
ずるぶん澤山あるね兄さん  
お日さまのひかりが  
びちびちはちけてる様だね兄さん  
聞いてると  
ねむくなるね兄さん







## 黄金の河

栗原古城

ヨーロッパの真中の或山國に「黄金の谷」といふところがありました。此處は雪の積つた高い山で四方を圍まれた狭い土地で、西の方の高い峯の頂上から大きな瀧が落ちてました。人里から見ると、此瀧は夕刻には、いつもキラ／＼と西日を受けて照り輝やき、丁度一條の黄金の河のやうに見えました。此處は昔は大變善い土地で、葡萄や小麦や玉蜀黍や何か々々澤山獲れましたが、いつの頃からか丸で砂漠のやうな瘠地になつちまつたので、誰一人棲む人もなく荒れ果てたのでした。すると、其隣りの小さな町に、シユワルツとハンスとグリユツクといふ三人の兄弟が棲んでゐました。もとは此「黄金の谷」の大地主でしたが、段々零落れて、此町へ来て金銀の細工を始めたのでした。シユワルツとハンスは無慈悲な慾ばりで、朝夕一番末の弟のグリユツクを折檻しました。その癖仕事の方は始終、弟にばかり任せ切りで、自分達は善くないことばかりしてゐたのでした。けれどもグリユツクは素直な性質でしたから、兄さん達の無理を少しも無理と思はず、毎まめまめしく働いてゐました。

一人は呆れて立つてゐるグリユツクにかう言ひました。

「乃公は黄金河の瀧の王だ。久しく魔法の爲めに此瀧の中に封じ込められてゐたのだが、今圖らず、お前の爲めに助けられたのだ。ついでには其お禮としてお前の希望通り、あの黄金河の流れを本當の黄金にする方法を教へてやらう。」  
かう言つて厭めしい小人は、一寸言葉を切つて、又續けました。

「それには、一人であの山の頂きまで登つていつて、お寺院の十字架の前に供へてあつた聖水を、あの瀧の流れの源に落すのだ。けれども若し不心得な者があつて、汚れた水を其處へ注げば、其奴は立どころに、其處で黒い石に變つて了ふのだ。それをよく覚えておけ。」  
かう言捨て、小人は風のやうに消えてしまひました。

### 三

丁度其處へ二人の兄さんが歸つて来て、坩堝の顛覆つてゐるのを見て、突然グリユツクを殴り付けました。  
グリユツクは仕方がありませんから、坩堝がひとりで火の中から躍り出した事や、小人から聞いた話を有りの儘話し

### 二

或日グリユツクは兄さん達から、古く家に傳はつてゐる黄金のお椀を鑄造して地金にすることを言付かりました。此お椀の中には、髪が生えた神々しいお爺さんの顔が彫つてありますので、グリユツクは何となく其仕事に嫌で堪りませんでした。大人しい子ですから、直と例の通り、それを坩堝に入れて火にかけました。其間暫くグリユツクは窓に凭つて西の方の山を見上げました。

其時は丁度夕暮で、山の上の黄金の瀧が今日は殊の外立派に金色に輝いて見えました。

グリユツクは思はず「あゝ、あの水が皆本當の黄金ならば可いかなア。」と獨言を言ひました。

すると坩堝の中から、誰とも知らず「グリユツク！ グリユツク！」と呼ぶ者があります。

グリユツクは唳驚して張向きますと、坩堝は自然に火の中から躍出して、床の上に顛覆り、立現はれたのはせいの高さ一尺五寸ばかりの小人で、前の黄金のお椀の中についてゐた人の顔と寸分違はない顔をしてゐました。



て、「何卒許して下さい。」と詫言した。

すると窓の塊りのやうな二人の兄さん達は、吾先きに此仕事をしてお金持にならうと思ひ、二人の間に喧嘩が始まり、到頭大男のハンスの方が一番兄さんのシユワルツを訴へて、牢舎に入れて了ひました。

それから次男のハンスは、お寺院へいつて、お水を貰はうと思ひましたが、お寺院の坊さんは、平生ハンスの善くない



行状を知つてますから、逆もお水をくれる筈がありません。

そこで、ハンスは、或晩こつそりお寺院へ忍込んで、お水を水筒に一杯盗み取り、それから自分の飲む水を他の水筒に一杯入れ、お辨當を用意して、朝早く西のお山へ登つて行きました。

お山は大變険阻で、書頃になつては、日頃山路に慣れてゐるハンスも非常に疲勞し、咽喉が乾いて溜りませんから、用意の水筒から水を飲まうとして、一寸立止りました。

其時不圖足許を見ますと、一匹の犬が寝れてゐて、死さうな聲を出して叫んでゐました。けれどもハンスは、そんなことは少しも構ひませぬ。自分は水筒の水を強か飲んで、おまげに足を擧げて其犬を谷底に蹴落して、登つて行きました。

すると、今度は、一人のお爺さんが行蹤れに成つてゐて、さも苦しさに喘ぎながらハンスの水筒を見て、「どうぞお情ですから、其水を少し私に下さいまし。」と申しました。

ハンスは、突慥貪に、「どうして、これがやれるものか、それよりも乃公が干上つて了ふやうだ。」と言つて、老人の前でさも旨さうに水筒の水を飲んで、行き過ぎました。

又少し行くと、岩の上に、小さな子供が死んだやうになつて、頓けてゐました。眼は引釣り、口はピクピク動いて、少しの水でも、咽喉へ通してやれば、生氣づくだらうと思はれるやうな有様でした。ハンスは、これにも眼をくれずに、自分ばかり水を飲んで只管頂上へと急ぎました。

頂上に行き着いた頃は、空に恐ろしい雷光がして、雷鳴が聞え、雨さへ少し降り出して、氣味の悪いこと譬へやうがないほどでした。けれども窓に目の眩んだハンスは、怖いのを我慢して、慥へながら、愈々龍の源の流の岸に立ちました。

見ると、水は凄まじい音を立て、流れてゐます。ハンスは肩から聖水の入つた水筒を下して、流れの中へあけました。『諸君！黄金河の流れは黄金になつたでせうか？』

否々、ハンスは其水をあけると同時に、全身の血が強く凍るやうに感じ、「あつ！」と言つたまま、眞逆様に流れの中に落ちて、大きな黒石になつて了ひました。

#### 四

家に居たグリユツクは、何時まで待つてもハンスが歸りませんから、自分で往つて見ようかと思ひましたが、それよりも牢に入つてゐるシユワルツ兄さんを出して上げて兄さんに行つて貰ふ方が上分別だと覺つたのですがそれにはお金があるので自分はそれから他の家へ雇はれて一生懸命に働きました。幾日か働いて、若干のお金が出来ましたので、それを持って警察へ往つて、シユワルツ兄さんを牢から出してやりました。

シユワルツは流石に喜んで、「それでは自分がお山へ行つて黄金を取つて來たら、お前にも少しは分けてやらう。」と言つて、前のやうに支度をして朝早くお山へ出かけました。此シユワルツも元來不良風評のある男ですから、眞面目な坊さんが到底聖水を分けてくれる譯がありません。そこでシユワルツは、こつそりお金をやつて、或る悪い坊さんから聖壇の前にあつた聖水を買つて、それを持つて行つたのでした。



山は前のやうに峻嶒でした。シユワルツは喘ぎ喘ぎ山坂を登つて行きました。午後頃になると咽喉が乾付いて了ひさうになつたので、兼ねて飲料に用意して来た水筒を取り出して飲まうとしますと、足許に、死にさうな犬が顔がつて、憐れな聲で泣いてゐましたが、少しも構はずに、自分ばかり水を飲んで、上へ登つて行きました。今度は老人の行倒れがゐる。「どうぞ其水を飲ませて下さい。」と手を合して拜みました。シユワルツは、それも構はずに行過ぎ、岩の上へ倒れてゐる子供をも情無く振棄て、頂上に行着きました。それで、シユワルツは持つて来た聖水を河流に注ぎますと、此男も其儘氣を失つて、水中に落ち込んで、黒い石に化けてしまひました。

兄弟の黒石が二つ出来上りました。

### 五

グリユツクは、シユワルツ兄さんも歸らないので、愈々自分の運試しにお山へ出掛けて行きました。此子は氣質の善い子でしたから、坊さんは喜んで聖水を分けて呉れました。子供の弱い足は重煩になると、もう非道く草臥れました。

で勢よく起き上り、籠を差して一蹴に下つて行きました。

これから道の景色が全然一變して、青々とした若草が繁り合ひ、奇麗な花が咲き亂れ、これまで見たことも無いやうな美しい鳥が轉つてゐました。それに空氣が清く澄んでゐるので、グリユツクは喜び勇んで頂上へと急ぎました。

すると行手に一匹の犬が死にさうな聲で呻吟してゐました。

グリユツクは、此犬にも水をやりたいと思ひましたが、生憎水筒はもう空虚でした。グリユツクは、一時途方に暮れましたが、思切つて、大切に此處まで持つて来た聖水の水筒を取出して栓を抜き夫を倒れてゐる犬の口に注いでやりました。

犬は起上ると同時に、忽然として、あの霹の殿めしい一寸法師の姿に變つて了ひました。此犬こそは、黄金河の王が、假りに其姿を換へてゐたのでした。

王は咲いてゐた百合の花を折つてグリユツクの持つて来た聖水の水筒の中へ其露を落してやりながら斯う言ひました。「私は前からお前の来るのを待つてゐた。善いから此花の露を水流の中へ注いで、それから大急ぎで「寶の籙」へ往け。」グリユツクは、水流の縁へ来て、水の中へ花の露を落しま

六八  
見ると、老人の行倒れがゐりましたので、憐れ深いグリユツクは自分の水筒を出して飲ませました。すると老人は、遠慮無しにぐくぐくと八分目以上飲んで了ひました。

グリユツクは情無いやうな、心細いやうな心地になりましたが、それでも何とも言はずに黙つて残りの水の入つた水筒を肩に掛けて登つて行くと、又道で死にさうな子供に逢ひました。グリユツクは、自分の饑渴も忘れて、子供の口に水筒を當て、やりますと、子供は残りの水を皆飲ん



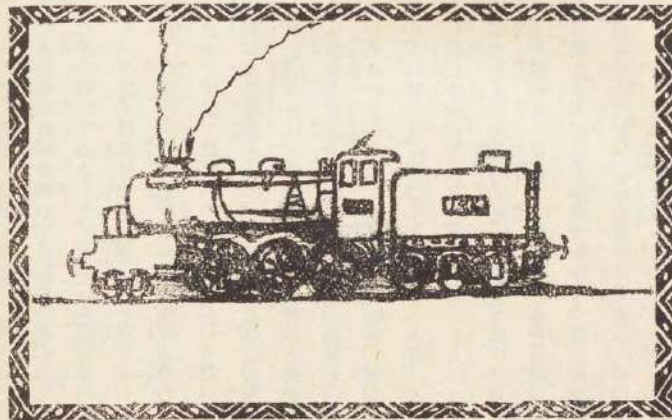
したが、何の變化も起りませんでした。それから大急ぎで「寶の籙」へ降りて行きました。

見渡すと、まあ何と言ふ變化でせう。これまで砂漠のやうだつた「寶の籙」は青々とした沃野となり、水晶のやうな小川が山の麓から湧いて出て、野原を貫いて流れてゐました。

グリユツクは、先祖の土地の此「寶の籙」へ主着して勤勉な農夫になりました。黄金は何處からも出ませんでした。肥えた土地からは種々な作物がよく出来ました。グリユツクは、慈悲深い、人になつてよく貧乏人を助けてやりました。

二つの黒い石は、今日まで頑固に、山の上の籙河の中に半分水に漬つてゐるさうです。(なはり)





自由畫「汽 車」  
東京府青山師範附屬小學校二年 齋藤 誠一

童 謠 野口雨情選

枯野原

東京 廣田 守一

枯れたか すすき  
 バサリ バサリ  
 なびく  
 赤く枯れた枯野原  
 はい はい 子供  
 何んで泣いてるんだ

鳥

仙臺 天江登美草

床屋の屋根に  
 とまつた鳥  
 なんといつて 啼いた  
 神樂の笛は  
 ビー ビーだと  
 啼いた

マアシヤリ

東京 日向 ちる

お月様の中の 點の子供に  
 けられて落ちた

一つ星

大阪 福田 稻甫

三日月さんの  
 隣に  
 一つ星が出てた  
 一つ星の 隣に  
 二つ星が 出てた

夕 焼

群馬 島 山 彪

夕焼 小焼で赤いのに  
 畑の父さん  
 まだ来ない  
 ぎいつこくまだ来ない

花びら

東京 西方幸次郎

一ひら 二ひら  
 三ひらめの  
 花がはろろと散つたとき

七〇

南の國が思はれる  
 冬のお室の青い草  
 静な唄が聞えます

私のお國は海の底  
 遠い緑の海の底  
 無事にゆかんせ帆立貝

日 暮

仙臺 鈴木 友花

おてんとさんが  
 きせるの火  
 おとした  
 雲が焼けた  
 日が暮れた  
 西の空ア大火事だ

お 星

大阪 關口 安一

月夜の晩に  
 お星様が一つ  
 天から落ちた

おきの龍が  
 ごーん／＼鳴りました

蚯 蚓

山口 杉村 白夢

二つに切られた蚯蚓が  
 頭と尻ッぽと喧嘩した  
 おれは頭だ  
 いや おれは頭だ  
 つばくらめ

長野 額母ひで郎

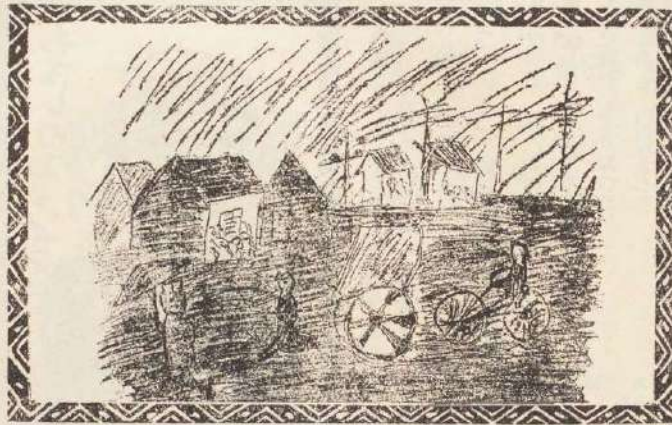
二匹で作つた  
 泥の家  
 今は五匹のお父さん  
 今は五匹のお母さん  
 今は五匹のお母さん

ころげ團子

愛知 加藤 義男

ころけた ころけた  
 お團子がころけた  
 お皿の中から  
 お盆の上へ ころころころ

七一



自由畫「雨の日」  
長野縣伊那小學校尋三 中村 茂



もしのあぢいさん



自由畫「私のあぢいさん」

東京市外手歌ヶ谷第一小學校尋五 松原 武子

蝶と花束

東京 櫻井 悲蘆

花束持つて 歩いてたら  
蝶が欲しそに飛んで来た  
しんだ妹が すきだつた  
花束なのと いひました

風呂

乾 早 高島 秋二

電氣が點いた  
電氣が點いた  
電氣が點いた  
明るくなつた  
お夕飯たべよと喜んだ

夕方

東京 關 つとむ

電氣

愛 媛 窪田 篤敬

風呂の歸りに  
一つ目の小僧と  
三つ目の入道と  
道の端に立つてた  
風 鈴  
山 梨  
遠 藤 伊 作  
風の吹くたび  
雨のしぶきに  
のうら／＼  
くるりとまはれば  
チンチリリン

雪降る晩

熊 本 森田 流葉

一ぬけた 二ぬけた  
早く家へ歸らう  
圓いお月さん出たから  
早く家へ歸らう  
雪の降る晩に  
コンコンが 啼いた  
腹がへつて ひもじがつて  
コンコンコンと 啼いた

お父様

東京 齋藤 泰忠

うちのとうさん  
やなとうさん  
うちへかへると すぐごはん  
いちどもわすれたことはない  
ほんとおりにおこな  
やなとうさん

桌

青 玉 横田 泰三

鶯よどこへいつた  
なぜ唱歌うたはない  
藪の中にするずに  
大きい聲でうたへ

途中

東京 片山 敏次

集の番兵さん  
頼みませう  
泥棒が来ないやうに  
見てておくれ  
金の星  
横 濱 村 上 保  
伸びる 伸びる 日が伸びる  
春のお日さま 背が伸びる

自由畫「K君の像」(賞)

下關市觀音崎町 古殿 松市



ばちくり／＼ 金の星  
金のお星さま ちんちくりん  
大きな恐い 赤い犬  
大きな恐い 黒い犬  
どつちも にらんだ  
始まつた

喧嘩だ 喧嘩だ  
ちよつかけろ

蝙蝠

新 潟 佐藤 幽光

橋の下に蝙蝠が  
ぶらんとたつて下つ  
てた  
腹がへつて 寒びく  
て  
夜になつても動けな  
い

書間の桌

北 海 道 有木 三郎

天の婆さん 米ついて 豆まいて  
あけるから 大風  
吹けよ  
泉 泉 寝呆け泉  
木から足 はつせ  
ぱたりと はつせ  
はつして 落ちて  
うろ／＼してろ  
てんびん様で  
のすぞ





若山幼年詩選  
水牧

雪ノ衣着テ(賞)

東京市小石川 關口 胖  
區小日向臺町

サラサラサラト雪ガフル  
寢臺ノ上カラノゾイタラ  
教會堂ノ丸屋根ハ  
吹雪ノ中ニツツ立ツテ  
雪ノ衣着テフルエテタ

評、眞白な屋根の軒から夕方の鐘が鳴りま  
す。雪はいよ／＼いつしやうげんめいに  
降ります。(牧水)

雪(賞)

長野縣松本 上島 良雄  
小學校五年

雪さん雪さん  
をどり子の雪さん

お前はをどりながら  
どこへ行く

評、わたくしも知りません。良雄さん良雄  
さん、あなたも来てをどりませう。(牧水)

ほほじろ追ひ

滋賀縣吉保町 木保 修二  
小學校高二年

ほほじろ ほいはい  
雪の野原を追つて行く  
評、短いけれどまことに面白い。幾度もく  
り返して歌つるとだん／＼によくなり  
ます。(牧水)

さくら

大阪市桃園 打田 久子  
小學校三年

ちれちれ さくら  
私の白いまいかけに  
一ぱいつもれ

はねつきさつこ

久留米島側 熊丸トミヨ  
小學校四年

はねつきさつこを

綴方

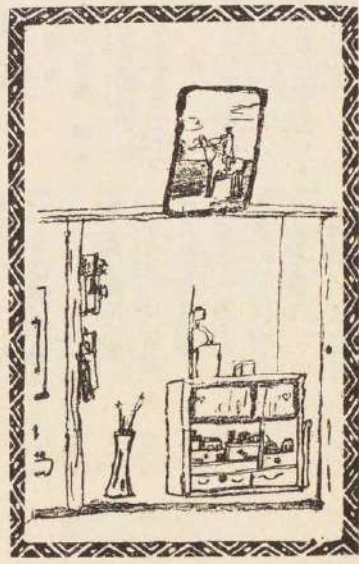
編輯局選

淺間山の噴火(賞)

長野縣協和 田中 利男  
小學校五年

大正九年十二月二  
十二日の晩である。  
私は夕飯をたべて、  
こたつで父と色々  
話をした。とつ  
ぜん、ド、ドーンと

いふ音がした。父が「淺間山だぞ。」と、  
大戸を明けて飛び出て行つた。  
私もその後について、ザウリと、ゲタ  
と、片びつこにはきながら、パタ／＼と  
飛び出て行つた。道に來た時は、山から  
はまつ赤な溶岩が、ドロ／＼とひどい勢  
で流れて行くところであつた。私は「ハ  
ッ」とばかりにおどろいて居た。空を見  
ればもく／＼とした煙が上つてゐて、そ



自由畫「このま」(賞)

京都市植柳小學校尋二 建田 恭一

なつて、淺間山の話ばかりをして居た。  
家中して。  
初めて船に乗つて(賞)  
青森縣鮎川 相馬 恒夫  
小學校五年

北海道のおよめに行つた姉さんが病氣  
だと云ふので、お母さんと私が晩の十一  
時のお船にのつて行きました。私ののつ  
てゐる船は比吹丸で、長さが十五間しか  
ない小さい船であり  
ました。私は今度初  
めて船にのつたので  
ゑふかとしんばいし  
てゐました。津輕海  
峽に來た時に、海流  
が流れてところ／＼  
にうづをまいて、恐  
しい氣がしました。  
其の時しげがしたの  
で波は山のやうで、  
船が小さいからぐら

初めて船に乗つて(賞)

青森縣鮎川 相馬 恒夫  
小學校五年

ぐらとして、くつがへりさうになりまし  
た。其時、私がかむねが苦しくなつ  
てうん／＼なりました。私ばかりでな  
く、となりの人も二階の人もみなくるし  
がつてはきました。其の時私もはきまし  
た。お母さんは船になれてゐるので平氣  
でありました。船がだんだん靜かになつ  
て、びかつと下北半島と津輕半島のとう  
だいが海にかややいて、船のまどから海

自由畫「景色」

長野縣松尾小學校六年 井深 す賀





する時は  
私のはねは  
天まであがれ  
おりる時には  
雪におくられ  
おりてこい

### 春 雨

愛知縣宮田  
小學校高二 栗本はるを

ひろい空からふる雨は  
みんなの上にもふつて居た  
お庭の中にもお屋根にも  
小つさな花のつほみにも  
しとくくくとふつて居る

### き じ

福島縣二本松第  
一小學校尋五 佐藤 ャク

いつも裏山で  
鳴いたきじ  
今日はどうしたか  
一聲も鳴かない

### 羊

東京市外高田第  
二小學校尋一 岡 毅 爾

ひつじ ひつじ かはいい小羊よ  
羊かひにつれられて  
のはらで くさをたべる羊  
かぜかふくとかへる羊  
よるになれば はこの中にぬる羊  
ほしがきえるピカ／＼と  
あさになつておきる羊

### 冬の空

東京府下大久保  
百人町一八七 鈴木 一 誠

お日様かくれた夕方に  
青い／＼空  
海のやうな空  
見てゐても寒いやうだ

### 椿

京都市立誠小  
學校五年生 岡本シナ子

もらつた椿のつほみ  
白いつばきのつほみ

を見たけしきはなんともいへないくらゐ  
です。函館までは四時間位で行けるので  
すが、今日はあれだったので午前の五時頃に  
函館のともしびがきらきらと水にうつり  
ました。私は其の時は非常に面白くて、  
むねが早くなほるやうにと、又姉さんの  
病氣がなほるやうにと思つてゐる中に、  
船は棧橋につきました。其の時、からす  
がが／＼とむかふの山の方から飛んで  
来ました。

### 一 年 生

茨城縣岩柳  
小學校尋六 粟野 トヲ

一年生のとよは本字を書いて來たと先  
生にはれたので、私と弟と作文を作つ  
てゐると、書物を持つて來た。をせると  
言つたので、私をへしてやりました。  
一年生のとよは出來もしないけれど、弟  
が一つ書いてやつたればとよは「そんな  
へだちやだいたつべい」と言ひました。  
弟「しやらくせ出來もしねえ書いて見る」

と言つてかかせる、「大」といふ字を  
いうれのやうに書きました。私と弟で  
大笑ひに笑ひました。今少しで書きをへ  
るので、うれしがつて、一生懸命書いて  
ゐる。終つたら、うれしがつておひるを  
食へに行つてしまひました。

### 今日の日記

京都市植柳  
小學校尋二 建田 恭一

目をあくときどきりと大きな音がした、  
何だらうと思つてまくの下からのぞいて  
見ると、やつでの一番高い所につもつた  
雪がおちたのだつた。べんじよへ行くと  
口がふるへて上と下との齒ががたがた  
きあたる。家の中へはひるとすぐこたつ  
へすつこんだ。すると父がもうおきよと  
いはれた。なかなか外へ出られなかつた  
がしまひにしかたなく出た。着物を着か  
へるとほつとあたゝかくなつた。それか  
らうらへ行くと、雪が一面つもつて居た  
ので小さなだるまをこしらへた。それが

た。わくをしまつてかどへ出ると種口君  
がいたので、まりなげをしてあそんだ。  
うちへかへつていもうとの本をしばらく  
よんでねた。

### でんでむし

山口縣柳井  
小學校尋二 久 保 巖

ほくかたの木に、でんでむしがとまつ  
て目を出してゐました。ほくが竹をもつ  
てきて、竹で目をつついてやつたら、目  
がひつこみました。それで、でんでむし  
目を出せといつても、目を出さんから、  
ほくはもうちつとまつたら、でんでむし  
が目を出したから、ほくが竹で目をつつ  
いてやりました。そしたらまた目がひつ  
こんだから、でんでむし目を出せといつ  
てもこんどは出さんから、ほくは竹で  
でんでむしをおとして、けたでふんでこ  
ろしました。

### 節分の夜



きのふごろからそろ／＼と  
かはい、笑顔を見せかけた

### 夏の空

福井縣本莊 三上 寛次  
小學校高二

いろいろな青空 誰か掃いた  
天女が掃いた ところどころに  
かあい、足跡 天女の足跡

### 豆のめ

長野縣小 中平 博男  
小學校三

すん／＼のびて  
一寸 二寸 三寸  
三寸めには日がくれて  
そのぼんの大箱を  
あたまにのせて  
あしたみたらば泣いてゐた

### 指環

芝罘白金 和田 武男  
狼町六七

母さんの指環  
かざりが無い

空の星様  
はめたいな

### 子犬

横濱市一本 大川 キヨ  
小學校

毎日のぞく犬のこや  
仔犬のめいめはあいたかな  
十日たつてもまだあかぬ  
めくらでなければよいけれど  
毎日のぞくエスの家  
十二日目にやつとあいた  
青い目 かはいいい目

### ごい屋

埼玉縣熊谷 宇野 清  
小學校尋三

春のとこ屋  
はさみの音が  
チャキチャキチャキ  
のきにつるした  
青い鳥が  
ちん／＼ちん／＼

京都市第二師 近江谷 玉井  
林小學校五年

「鬼は外福は内……」と節分の夜に、お父様が大きく／＼聲でお豆を撒かれた。

その音は實にすばらしいものである。戸を開け何處から何處までもお豆を撒いて今度は二階へ行つて、えんがはや、大座敷や、私達の勉強室や、兄さんの勉強室等に撒いて、お父様は下へ下りて行かれた。私は姉さんや弟達と御飯をいたゞいてから、二階の大座敷の電氣を消して豆合戦をした。私と姉さんが味方になつて弟達二人が一つしよになつてした。お豆をバラ／＼と所きらはす投げつけた。さうして遊んでゐる中に、大きい弟のなけたお豆が、私の體に入つて大そう困つた。弟達はよろ／＼で手をたゞいてゐた、又早くお豆を拾ふ競争もした。大きい弟はするくて、お豆をふところへ入れておいて、數へる時には、それもよせて數へた。大分長くさうして遊んでから電氣をつけた時は、パツと急にあたりが明るく

なつてまぶしかつた。そこらを見まはすと、お豆がぐちや／＼になつてつぶれて大座敷中お豆のかすだらけであつた。私は大そう愉快で樂しかつた。

### 私がしたおしるこ

岡山市出石 小橋 幹子  
小學校四年

私は今日晩の夕飯の時、お母さんにいつておしるこをこしらへました。この間お母様がしるこをしてゐらつしやつたのを、よく見ておいたのでよく分つてゐました。それで誰にも聞かずに獨りしました。一番にゆきひらを洗つて、その中へ水を入れてしちりんへかけました。そしてゆきひらの中へこを入れて、おさたうと、お鹽を入れました。おさたうはたくさん入れて、お鹽は少し入れました。それからおもちを二つ入れました。私はどうぞおいしくできればよいと思つて、一しやうけんめいにしやもじでませてる内に、ぐだ／＼といつてきたのでおふ

きんでもつておろしました。そして茶ぶだいのそばへ持つて行つて皆なのへ、つけて見ると、私はどんな味かと一番に食べて見ました。みんなもおいしいといつたので私は大そううれしうございました。

### 火事

(幼時の思出)  
神戸市大開 高橋 久藏  
小學校尋五

私が一年生の時、ねまでねて居ると、俄に表がやかましくなつて來た。時々「火事だ／＼」といつて居る聲が聞えてくる。驚いて表へでると、私の家から四けん目のふる屋がやけてゐる。お父様は「これはえらい事だ早く荷物を出せ」といふので、お母様といつしよに荷物をはこんで、表へ出した。ふとお父様が「あつ」と聲を出された。何だらうと見ると私の親類の家の二けんとなりがやけた。もうこちらは大ぢやうぶだといつてあちらのしるいの家へ行かれた。その時はもうとなりの家へうつつてゐた。私は、もう自

分の家はだいちやうぶだがしるいがあぶないといふことをきいてふるひがとまつて居つたが、またふるひだした。やうやうその火事もすんで、お父様は歸つてこられた。火を出した所は親類からすこしはなれた疊屋だつた。そして六むねほどやけた。その時は風がこちらへふいてをれば私の家はやけるのだつた。

### 幼い時の俳句

臺灣臺南第一 重松 昌也  
小學校五年

日曜日の午後でした。本箱の中をせりりしてゐると、ほりだらけの小さい手帳がでてきました。何氣なく開いて見ると、「古のきや あまたれおつる水の音」と書いてありました。ほんとにをかしな俳句なのでふき出してしまひました。これはたしか九つの頃に芭蕉翁の作つた名句の中の「古池や かはつ飛こむ水の音」といふのを見て書いたのです。幼い時にはこんなをかしなものでもをかしなかつたのでせう。





信 通

自由畫寸評

山本 鼎

▽今月は佳い畫がすくなかつた。

そろ／＼暖かくなつて來ますから、諸君は外へ出て見ている／＼な物をお描きなさい。木でも、家でも、草でも花でも、雲でも石でも、みんなそれ／＼の姿や、色や、形をもつて居るのをよく見て御覧なさい。すべての物は、ちやうど、君達や僕達の顔が一つひとつ異つて居るやうに變つて居るんです。そのくせ、むろん人間は人間、動物は動物で同じやうなです。同じやうな處と、一つひとつに異つて居るところとをよく氣をつけて御覧なさい。そしてそれを見覺えて居る通りの又見えて居る通りの形や色や姿を描くんです。落ついでそしてびく／＼しすに、鮮明に

お描きなさい。

▽桑野英文君の「カキ餅ホシ」西本義秀君の「とうきびかし」二つ共面白い風俗畫ですが、少しぞんざいですね。描きかたよりも見かたがね。

▽久保村幸一君の「冬の町」は落着いてかいて居るが、ちと臆病な運筆です。だから物體のあらはれがへな／＼して居ますよ。

▽前所光雄君、飯田若夫君、松原修治君達の風景のスケッチはどれも悪くありません。ど／＼送つて下さい。

▽久保田公平君の「鼠」は面白い。併し一番大きい鼠の顔は、牛のやうです。姿も悪くない。併し、少しやばりぞんざいのやうです。君は十三位でせう。もつと、實物の形や彩をよく見きはめて繪の具をおつきなさい。

▽北岡植三君の、淀川長治君の雜誌かなにかの畫を寫したか真似したかです。自由畫は人真似の畫をとりませんよ。こんどは君自身の眼に映つた實物のありさまを描いて送つて下さい。

▽建田恭一君の畫はいゝです。もつとたく／＼お描きなさい。

▽胡間六郎君の「かりうど」加藤庄太郎君の「僕の友達」はだれの「竹馬」も林幸彦君の

新しく出た本

◆鷗外と時計(西條八十先生著)——童話の大家西條先生の最初の童話集です。最近までの作は全部この中に集つてあります。先生の童話の麗しさは今更ら述べるまでもありません。幾度讀んでも、あきず美しい話ばかりです。日本の童話のために盡した先生の努力が、どんなに大きなものであるか感ぜさせる本です(東京府下高田町赤い鳥社發行金一圓廿錢) ◆話方十二月(九月の巻)(玉井幸助氏著) — 夜の青空に月や星が輝いてゐるのを見て少年少女は不思議に思ふでせう。この譯を解りよく面白く書いたのがこの本です。安くてな／＼／＼爲めになる本です。四六判一四頁半込白銀町育英書院發行、定價金廿五錢) ◆人形と動物(池田永治氏畫)——厚紙に人形と動物の美しい畫がかいてあるのを切抜いて、びよ／＼と手足をつけ、深山のお人形と動物をこしらへ上げるのです。子供の手工細工としてどんなにか喜ばれる事です。手田細工象文館發行紙入十六個分送料共金八十三錢) ◆神様お伽噺、佛様お伽噺(藤川淡水氏著) — 「神様お伽噺」の方は日本の澤山の神様に就て傳つてゐる名高いお話や、面白いお話や珍しいお話や、不思議なお話を集めたもので、佛様お伽噺の方はお釋迦様とお弟子たちや佛敎の神様たちのお話を集めたもので、外に類のない珍しいお伽噺です。(四六判二五〇頁、鶴町區山元町新光社發行、各冊金一圓五十錢)

△自由畫佳作 △インキツギとペン(東京 小林次郎) △運動場(山口 内藤チツ子) △カキ餅ホシ(福岡 桑野英文) △機關車(東京 齋藤誠一) △僕の友だち(神奈川 加藤庄太郎) △新式電車(東京 寺田元一) △春(廣島 村上正美) △讀書(福井 石橋周一) △私(千葉 明石きよ子) △道ተ家(山口 宮田武夫) △とうきびかし(福井 西本義秀) △山間の村(三重 前橋元雄) △僕の家(前(和歌山 橋本) △かりうど(福井 胡間六郎) △渡り驛(滋賀 橋本貞一) 叔母さん(臺灣 重松昌也) △遠の家(神奈川 林善輝) △銀座通(東京 有山崑) △冬の町(長野 久保村幸一) △家と木(三重 佐々木繁) △お祭の行列(奈良 吉村五夫) △田舎の秋(青森 對馬千代一) △子守り(横濱 大川キヨ) △スキー(北海道 河野謙) △山車(群馬 田部井明) △爺の家(群馬 田中茂治) △湯わかし(長野 田口喜一郎) △風景(三重 栢植源家) △むかひの家(織布 武田キクエ) △犬(東京 林幸彦) 軍艦(東京 山中宏) △旗(長野 宮下左文) ◆幼年詩佳作 △もやう(長野 推名國夫) ◆枯葉の行方(京都 植村廣太郎) △雨(福井 橋本均) △流れ(青森 對馬千代一) △猿と蟹(愛知 加藤義男) △鳥と雀(兵庫 土田安治) △雀が帰る(朝鮮 佐藤義信) 時計(滋賀 藤島貞一) △小人の御殿(東京 松下春三) △足あと(福井 石橋周一) △雨蛙(千葉 栗飯原トミ) △潮(京都 近江谷三枝) △北風(熊本 父母鈴子) △雨(東京

畫犬小犬の圖も僕の好きな畫でした。

▽明石きよ子さんの畫はちとぞんざいですね併しあのやうに大まかな毛筆で墨畫を描くのは決して悪くありません。も一度自分の顔の輪廓や目、口、鼻、の實際の形をよく見て、まかか見える事ではない、自畫像を送つて見て下さい。

童話の選後に

野口雨情

童話は、子供が作つても、大人が作つても、わるいものはわるいし、いゝものはいゝのです。子供でなければ駄目だの、大人でなければいけないのとは申しません。子供でも大人でもいゝものはいゝのです。但し大人は子供よりも、多く本を讀んだり、多く字數を知つてゐたり、いろんな影響を受けて頭が判斷的になつてゐるから、子供の様に理屈でない無邪氣な言葉を忘れてゐる場合が多いのです。童話を書くときは、何んにも考へずに昔の昔の子供に立ち返つてさへ書けば私の経験によつて、子供よりも大人の方に遙にいゝ作が見られます。今回掲載の出來なかつた佳作中で



綴方について

選者

今月はいものがたくさんあります。なかでも特にいものは来月にまはしました。来月になつてまいものは来々月にまはします。そこで始めて七月號の讀者文藝欄に出ることになるのです。まはつたものは「寒い朝」「べつこ釜さん」「私の妹」外七篇です。

今月入選の田中さんや相馬さんのものでもこれまでよりかすつといふものです。栗野さんの大といふ字をゆるいのやうに書いたと

通信

問答

▲私はもうせんから「金の船」を讀んでみますが、こんどの「馬賊」と仙人」といふお話が一ばんようございまして、神奈川、村上清夫

あるのはよくできました。それがほんとの子供の言葉です。人まねでもない、かりものでもない。久保さんの「でんでむし」はよく子供のやりさうなことを正直に書いたもので、から眼に見えるやうにはつきりしてゐます。

募集童話に就て

今月集つた童話の中には特に七月號の「特別懸賞童話」と記してないものもありますが恐らく全部その意味で投稿されたものと思ひますから、今月の普通の選は止める事にしました。念の爲めおことはりして置きます

幼年詩として取扱つてゐます。童話と幼年詩は一讀してすぐ區別がつかます。が、何かの都合でまちがつたのだと思ひます。これにめぐすにこの後もお寄せ下さい。(記者)

▲楠山正雄先生の童話集は東京の富山房から澤山出てゐます。世界童話寶玉集、イソップ物語など、同じく精華書院からは「不思議の國」「驢馬の皮」など出てゐます。(記者)

後の山六爺さん

爺さんの後篇が出ることになりました。山六爺さんは後篇になつてどんな活躍をするか、實に見ものです。今月から附録として毎號出ますが、ためて綴ると可愛い本が出来るやうになつてをります。

大懸賞讀者文藝募集

締切、四月二十日限り

金の船 七月號誌上に發表する大懸賞付童話、童話、綴方、自由畫、幼年詩の締切は四月二十日午後六時限りです。詳細は前號(三月發行の金の船)に載せてあります。懸賞原稿には必ず大懸賞と朱書して東京市外田端三百五十一番地金の船編輯所宛に送つて下さい。

金の船の合本

第三輯

(第二卷十一號より第三卷四號まで六册合本)

新製本出来 定價一圓八十五錢

第一輯

(第一卷初號より第二卷四號まで六册合本)

第三輯製本出来 定價一圓五十錢

第二輯

(第二卷五號より第二卷十號まで六册合本)

第一輯製本出来 定價一圓八十五錢

アンデルセン

世界名作童話集 (全一冊)

定價參拾五錢

誌友募集

誌友には大特典あり 規則書は編輯部宛に 申込みはおくります

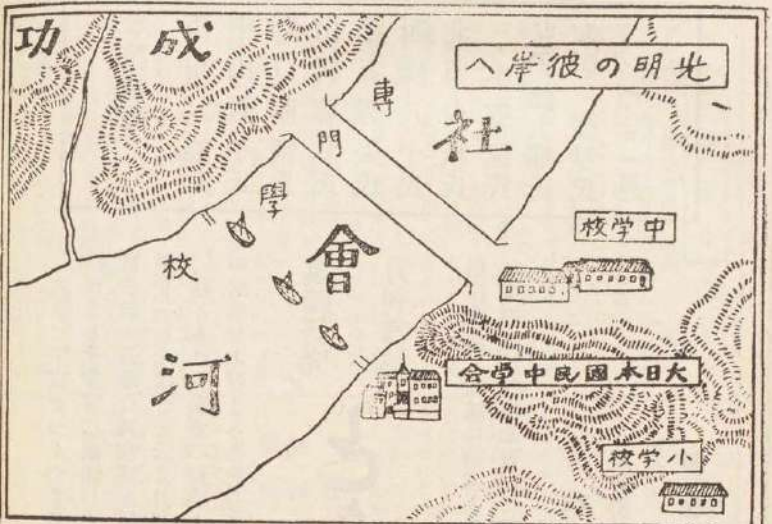
- 日向桃子) △兔(東京 近藤春一) △午後後の雨(神戸 勝野棟) △水車(愛知 浅田廣) △木の葉(群馬 村上信雄) △初雪(福井 海江隆雄) △じざうさん(群馬 高橋都治) △寒まわり(愛知 菊田一雄) △木の葉(福井 三上寛次) △雪(静岡 井上希四郎) △すゝめ(神奈川 林善祥) △雪と鏡(福岡 桑野英文) △雨の夜(福岡 楠田ヨシ) △雨だれ(福岡 緒方久子) △つばめ(徳島 勝前幸夫) △梅の木(三重 武内尚雄) △石屋さん(栃木 福田定吉) △居睡(大阪 池田郁彦) △山茶花(廣島 廣井千代子) △花見(福井 水野豊) △大寒小寒(福岡 桑野重子) △餅つき(千葉 明石きよ) △草の芽(鹿兒島 東進實徳) △かあさん雀(東京 松原武子) △うし(東京 中島孝道) △雨(福岡 大内マサ) △雀(福岡 寺西セイ) △冬の空(東京 鈴木一誠) △雀(茨城 村岡長逸) △かたつむり(長野 井深もも枝) △星(長野 柳澤トヨ子) △あうむ(福井 神谷淳) △雪だるま(東京 木目田政治) △燕(北海道 佐藤春吉) △小川(廣島 小森君江) △綴方佳作(△妹の子(東京 井關正) △雪の日(埼玉 肥土喜三郎) △雪の町(青森 製馬千代) △お兄さんと妹(廣島 冬木妙子) △一年生(東京 内田甲子) △ヒスト

- ▲金の船誌友 ○東京 前田奎三君○福岡 吉瀬彌之助君○東京 人見静子君○高知 安田秘君○宮崎 寺原良造君○臺灣 下司栄君○大分 楓江小学校児童文庫○島根 中村俊秀君○大阪 吉田正五郎君○長野 小林民雄君○愛媛 木下俊夫君○京都 建田泰一君○静岡 荒波健吉君○山口 門司一男君○經濟 住吉亮君○千葉 酒井智吉君○北海道 佐藤三信君○東京 坂田露香君○東京 松下春三君○群馬 青柳花明君○京都 田和幸一君○愛知 西本寛一君○東京 加藤辰君○福井 石森一君○大阪 久保田公平君○千葉 長谷川竹雄君○大阪 大塚一雄君○山口 水浦榮雄君○長野 塚本きみみ君○名古屋 茂木泰三君○新潟 外山祐之丞君○滋賀 村田道太郎君○長野 上田春枝君○京都 土田翠子君○鹿兒島 東郷英敏君○山口 竹田正造君○三重 安井曾平君○廣島 水島茂一君○北海道 山本素人君○東京 西川奈賀子君○樺太 狩藤吉郎君○栃木 大山清太郎君○山梨 岩淵六郎君○京都 長井道夫君(以下次略)









**橋無くとも舟有り!!**  
 中學校へ行けなくても落膽する  
 必要は無い

競争の劇しい今々の社会に飛び出して成功しようとする人にとって何よりも  
 必要なのは中等教育の素養である。云つて、いろいろな事情で中學校へ行け  
 ない人はどうした。よいかや、それはたゞ一つの良法がある、ほかでもない  
 本會へ入會して本會の理想的出學誘致に就いて學ぶことだ。本會の光榮有  
 る歴史や、本會講義録の特色は今更迭する必要があるまい。

會長 尾崎 行雄  
 顧問 山内博士  
 井上博士 浮田博士  
 新渡戸博士 岡田前文相  
 三宅博士

◎今が入會の絶好期!! 見本つき規則書は無料で送上げます。  
 改訂を加へたのが現在の講義録である。  
 共に歡樂に於ける通信教授法を参照し更に今日  
 と云ふことに就いて本會は十八年と云ふ長い開研  
 究に研究を重ねて来た上に、最近尾崎會長の歸朝  
 どうしたら通信教授で完全に中學校の課定を  
 わかふくしつかりと覚えさせることが出来るか  
 と云ふことに就いて本會は十八年と云ふ長い開研

京神田 駿河臺  
**大日本國民中學會**

櫻葉東京四二〇〇番電話神田  
 三三〇〇三番  
 三三〇〇三番

金の船 第三卷 附録

の 後やま  
**山六爺さん**  
 ぢい

沖野岩三郎

四十七人の殿様たちと、山六爺さんと婆アさんと、總大將軍の乞食と、右大將と左大將と合せて五十二人は、毎日毎日一所懸命に眠つて、一所懸命に働いて、一所懸命に勉強して、一所懸命に遊んでゐるうちに、いつしか湖水の周圍に三百町歩の立派な田圃や畑が出来ました上に、みんな身體が達者になつて、そして一かどの學者になりました。

だから山六爺さんは、夕方畑から歸つて来る時、空を眺めて、「婆アさん、御覽なさい。今晚は金星があんなに火星に近づいてゐますよ。二つの星の間隔は、お月様の直径位しかありません。」と云つても、婆アさんは夫れを生意氣だとも、知つたかぶりだとも言ひませんでした。其のかはり婆アさんが田圃の水を見廻つてゐる時、畦の草を刈つてゐる伊豫の守い右衛門に、

「もしもし伊豫の守さん、私は今和歌を詠みましたよ、其の歌は木、  
 物書きて倦みぬる時は口笛に



といふんですよ、旨いでせう、私の歌は。」と云ひましても、い右衛門はそれを生意氣だと言つて笑はないばかりか。

「私も和歌を一首作りました。その歌はかう言ふんですよ、

ひたすらに草刈り居ればかまきりの

足を鎌にて斬りし悲しさ

どうです、私も言いでせう。」などと言ひました。

土佐の守と右衛門は動物の學問が好きで、筑前の守と右衛門は動物の學問が好きでした。植物學の大家は陸前の守と右衛門、天文學の大家は、山六爺さん、和歌の上手なのは婆アさん、地理學の大家は尾張の守と右衛門といふやうに、お終ひには夫々専門の學者も出來ましたが、醫者の學問を知つたものは一人もありませんでした。何故ならば、能く寝て能く動いて能く遊ぶ人達に、病氣といふものは無いからでした。

或日政治學の大家である、若狭の守と右衛門と、地理學の大家尾張の守とが相談の結果、山六爺さんにこんな話を致しました。

「山六爺さん、我々の拓いた田と畑とは合せて三百町歩になりました。だからあの田畑を一人前に一町歩づつ分配して、めいめいに家を二軒づつ建てようぢやありませんか。」

すると、山六爺さんは不思議さうに、

「五十一人が一町歩づつ取ると、二百四十八町歩残るぢやありませんか、それはどうするつもりですかと訊きました。  
「それはかうしたいのです。あの小高い丘の上へ、大きな立札を立てて、其札に、  
(能く動いて能く勉強して能く遊んでよく寝る人二百四十八人に、一人前田畑を一町歩づつ差上ます)と書くのです。」

「夫れは宜からう、總大將殿は何と仰しやつたですか。」

「總大將殿も右大將も左大將も皆大賛成です。」

「では早速其の通り致しませう。」

そこで、大工の上手な工學の大家、加賀の守と右衛門に頼んで、大きな立札を拵へて貰ひました。そしてそれへ習字の上手な但馬の守と右衛門が見事な文字で、すらすらと、(能く動いて能く勉強して……)といふ文句を書きました。

立札が出来上りますと、力持の對馬の守と右衛門は、それを小山の上に擔いで行きました。根室の守と右衛門は穴を掘りました。陸奥の守と右衛門はそれを立てました。すると、測量學の大家である長門の守と右衛門が遙か下の方の畑の畔からそれを見て、

「おうい、其の立札は三分五厘ばかり右の方へ傾いてゐるぞー」と、叫びました。

さうして、これが終りますと、此の立札を見た近くの町や村の人達が、「山六爺さん、どうぞ私にも一町歩の田圃を下さいまし。」



「婆アさん、どうぞ私にも……」

「總大將どの、どうぞ私にも……」

「右大將どの、どうぞ私にも……」

と云ふやうに三日目には、もう二百四十八人は満員になつてしまひました。

それから加賀の守が右衛門が棟梁になつて湖水の傍へ、ずらりと三百軒の家を建て並べる事になりました。

土地を貰つた人達は、自分の奥さまや息子や娘をつれて来て、毎日毎日普請を手傳ひました。

三百軒の家の礎を据え終つた時、一度に礎搦祝を致しました。其日は屋敷毎に二つづつ合せて三百の低い臺が出来て、其上に一人づつ、歌の上手な男が登つて、鉦で造つた大きな采配を打振つて、

「祝ひ目出度の若松さまよ……」

枝も榮える、葉も繁る……」

と聲を挿へて、節面白く歌ひました。すると千五百六十人の男、女は、石搦棒に結びつけてある十本づつの繩を引ながら、

「はりわのサア、これはのサア、ササよういとこせエ……」と一齊に囀り立てました。そしてドーン！

かうして面白い石搦祝をしてあます間に、羽後の守が右衛門は、二十人ばかりの若い娘達を指揮して、四石八斗の赤御飯を焚きました。そして一つ三合づつの大きなお握りを千六百こしらへて来て、

それを一人に二つづつあげました。

石搦の済んだ三日目は棟上でした。朝から棟梁の加賀の守が、必死になつて指圖をしましたので、勇ましい番匠槌の音が、トーン、トーンと峰から峰へ響き、多勢が材木を撞ぐエンサカホイ、エンサカホイの掛聲は谷から谷へ響きました。

夕方お月様が、西の小山の立札の所へ沈みかけた頃は、湖水のぐるりにずらりと同じ大きさの家が三百軒建て並べられました。

それから一月ばかりは、磐城の守が右衛門の指圖で、大急ぎで屋根を葺きました。能登の守の右衛門は、左官の大將になつて骨を折りました。

近江の守が右衛門は礎を作る指圖をしました。伯耆の守は右衛門は九百本の箒を作つて來ました。そして一本は坐敷用に、一本は庭を掃くために一本は化粧室をお掃除するために使ひました。

翌日の朝日には、みんな此の新しい家へ引越して來ましたので、俄に三百軒の家が出來ました。家には二階が一つあつて、下は二室でした。

そこで、今まで山六爺さん達の住んで居た大きな小屋を學校に使ふ事にしましたが、俄に多勢の人數になりましたので、どうしても教場へみんなを入れる事が出來なくなりました。

さア、どうすればよいだらうと相談しましたが、何事にも考へ深い、大和の守や右衛門は、かう申しました。

「私は昨日から、三百軒の家に住んでゐる人達の國勢調査をして見ましたが、丁度人の數は男が九百



五十二人で女が六百四十八人あります。五年十年の後には二千人以上に殖えるでせうから、今から大きな學校を建てる必要があります。それから大きな圖書館を一つ建てねばなりません。今一つは大きな劇場を立てて、其所で音樂會を催したり、お芝居をしたりして、みんな無邪氣に仲よく遊ばねばなりません。」

それを聞いた一同は、一人も故障を言ふものが無く、早速その建築に取りかかりました。

秋の稻刈入まで丁度一月あるので、千六百人は心を合せて、建築を急ぎましたから、九月の半頃には立派な、三軒の家が出来上りました。

さて、落成式を挙げる前に、其の三軒の家の名前を命ければならないので、みんなが二つ所に集つて相談しました。それは、劍路の守く右衛門に任せる事に致しました。

で、く右衛門は頭を括つて考へた結果、山六爺さんが此の新らしい村を最初に拓いたのだからといふので、學校の名前は、「山六學校」それから、大の「黒」と狼とが、大變能く働いたのだからといふので、其の記念に啼聲を二つ合せて圖書館の名を、「ワーワン館」、三人の乞食が大變骨折つてみんなを賢くしてくれたといふので、その記念に、新しく出来た劇場を「乞食座」と申しました。



巖谷小波氏著  
岡野榮氏畫

新刊

オトギウタエ

第一卷 第二卷 各金七拾五錢 郵税各金八錢

第三卷 四六 二倍判 壹册 定價金七拾五錢 郵税金八錢

御伽本が一家團欒の卓上に如何に價値を有するかは今日子を有する親御が誰方でも度實見すると此冊子に於て御伽の國は御子様方の美しい希望と歡樂に充ちた王國でありま  
す、殊に日本でも最も有名な人口の材料は御子様方の誰方でも一わたり知つて居なければな  
らぬ、面白可笑しく歌風に書き改め、挿畫を添へてあるのです、家は丁度春の小波先  
生が面白可笑しく歌風に書き改め、挿畫を添へてあるのです、家は丁度春の小波先  
に出で種々な花が咲き亂れ、居る様で、手に取り上げたお開けでも心は踊ります  
お父様お母様に勧められずとも、獨りで見ると、お子様方の手に取り上げたお開けでも心は踊ります

巖谷小波氏著

日の丸お伽文庫 四六判全五册 定價各金四十五錢 郵税金四拾貳錢

同 氏 著 鉄入長方形全壹册 定價金壹圓拾貳錢 郵税金拾貳錢

スイング子供四十八景 四六判全三十五册 定價各金貳拾五錢 郵税金拾五錢

日本一の畫 四六判洋裝全壹册 定價金貳拾五錢 郵税金拾五錢

修身お伽 四六判洋裝全壹册 定價金貳拾五錢 郵税金拾五錢

鹿島鳴秋氏著

お伽十五夜物語 四六判全壹册 定價金壹圓拾貳錢 郵税金拾貳錢

同 氏 著 日比省吾氏著 才ハナシ 四六判全五册 定價各金八拾五錢 郵税金八拾五錢

竹貫佳水氏著 東西お伽訓話 四六判洋裝全壹册 定價各金八拾五錢 郵税金八拾五錢

日曜お伽 四六判洋裝全壹册 定價各金八拾五錢 郵税金八拾五錢

通天辨濱橫 (番二五八—東京特撰)

町西上岡福 (番十五—兵庫特撰)

町分國臺仙 (番五一—喜仙特撰)

丸善株式會社

(番五—東京特撰)

下臺河駿田神京東 (番六一—二京東特撰)

筋橋齋心阪大 (番四七—阪大特撰)

通條三都京 (番三七—一都大特撰)





# 月五の越三

五月人形陳列會 (四日まで)	夏丸帶陳列 (二日より)	古名畫複木展覽會 (二日より)	下萌會繪畫展覽會 (八日)	御召小紋陳列 (十日)	插花器陳列 (同)	中形浴衣地陳列 (十七日より)	團扇、扇子陳列 (二十日より)	定休日 ◆ 十日 ◆ 二十五日 ◆
----------------	--------------	-----------------	---------------	-------------	-----------	-----------------	-----------------	-------------------



## 店服吳越三

◆◆ 町河駿京東 ◆◆

大正八年十月十六日  
大正十年四月五日  
大正十年五月五日  
大正十年五月一日  
發行所 東京 本  
月刊 二日發行

東京 キンノツノ社 發行

(定價 參、拾錢)